

藏人遺跡発掘調査報告書Ⅰ

— 藏人遺跡第10次発掘調査 —

平成19（2007）年3月

吹田市教育委員会

序

蔵人遺跡は、弥生時代から中世にかけての集落遺跡です。昭和52(1977)年度に行った第1次発掘調査以降、これまでの調査では、中世の集落に関する資料がとくに多く出土しており、中世の文献史料に登場する蔵人村との関連が考えられています。

今回、報告致します蔵人遺跡第10次発掘調査では、中世の遺構・遺物とともに、数多くの弥生・古墳時代の資料について確認することができました。蔵人遺跡が広がる一帯は、古代に施行された条里制の痕跡が比較的近年までよく残っていました。第10次調査においては、そうした条里地割に関わる遺構を確認するとともに、この一帯が古くより川の氾濫を受けやすい環境にあったことを窺わせる資料などを得ることができました。

市民の皆様には、本書がこの地域の人々の暮らしの歴史とともに、そこにあった自然環境と人々との関わりの一端を知っていただくことの機会となれば幸いです。

平成19(2007)年3月

吹田市教育委員会
教育長 延 地 和 子

例　　言

1. 本書は、平成8(1996)年度に実施した、吹田市江坂町2丁目449、500-1、500-3、502における蔵人遺跡第10次発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 発掘調査は、吹田市立博物館文化財保護係賀納章雄・堀口健二・増田真木が担当した。整理作業については、吹田市岸部北4丁目10番1号、吹田市立博物館内資料整理室において実施し、資料の保管も同所において行っている。
3. 本文の執筆は、各調査担当者の見解をとりまとめながら、賀納が行った。
4. 図中の方針は磁北を示し、標高はTP(東京湾標準潮位)を示す。
5. 遺物実測図の縮尺は、土器を1/4、石器を3/4、木製品を1/4もしくは1/8とした。
6. 資料整理に際しては、獣骨を大阪市立大学医学部安部みき子氏に鑑定して頂いた。
7. 発掘調査においては、建築事業者である関山守洋氏から多大な協力を得た。記して感謝致します。
8. 発掘調査および整理作業には以下の方々の参加を得た。
(発掘調査)
木村　達、福住日出雄、阿部泰之、落合高晴、玉井義也、丹羽まどか、松下佐緒里、
村上成幸
(整理作業)
花崎晶子、佐藤健太郎、秋山芳恵、今西加奈、大西文代、小川里美、木松安紀子、
桑原暢子、高井明美、谷真理子、宮武　聰、林　裕子

目 次

| | |
|-----------------------------------|----|
| I. 位置と環境 | 1 |
| II. 調査に至る経過 | 4 |
| III. T A 区の調査成果 | 6 |
| (1) 基本土層序 | 6 |
| (2) 遺構・遺物 | 8 |
| a - 1. 第 I 面の遺構 | 8 |
| a - 2. 第 I 層・第 I 面の遺物 | 10 |
| a - 3. 第 I 面のまとめ | 12 |
| b - 1. 第 II 面の遺構 | 12 |
| b - 2. 第 II 層・第 II 面の遺物 | 15 |
| b - 3. 第 II 面のまとめ | 16 |
| c - 1. 第 III 面の遺構 | 17 |
| c - 2. 第 III 層・第 III 面の遺物 | 20 |
| c - 3. 第 III 面のまとめ | 22 |
| d - 1. 第 IV 面の遺構 | 22 |
| d - 2. 第 IV 層・第 IV 面の遺物 | 27 |
| d - 3. 第 IV 面のまとめ | 29 |
| e - 1. 第 V 面の遺構 | 31 |
| e - 2. 第 V 層・第 V 面の遺物 | 33 |
| e - 3. 第 V 面のまとめ | 34 |
| f - 1. 第 VI 面の遺構 | 36 |
| f - 2. 第 VI 層・第 VI 面の遺物 | 38 |
| f - 3. 第 VI 面のまとめ | 39 |
| g - 1. 第 VII 面の遺構 | 40 |
| g - 2. 第 VII 層・第 VII 面の遺物 | 45 |
| g - 3. 第 VII 面のまとめ | 51 |
| h - 1. 第 VIII 面の遺構 | 52 |
| h - 2. 第 VIII 層・第 VIII 面の遺物 | 54 |
| h - 3. 第 VIII 面のまとめ | 56 |

| | |
|---------------------|-----|
| i - 1. 第IX面の遺構 | 56 |
| i - 2. 第IX層・第IX面の遺物 | 59 |
| i - 3. 第IX面のまとめ | 65 |
| j. その他の遺物 | 66 |
| (3) T A区の調査のまとめ | 66 |
| IV. G区の調査成果 | 68 |
| (1) G 1区 | 68 |
| (2) G 2区 | 73 |
| (3) G 3区 | 77 |
| (4) G 5区 | 78 |
| (5) G 6区 | 85 |
| (6) G 7区 | 90 |
| (7) G 8区 | 97 |
| (8) G 9区 | 100 |
| (9) G 10区 | 105 |
| (10) G 11区 | 108 |
| (11) G 12区 | 112 |
| (12) G 13区 | 116 |
| (13) G 16区 | 120 |
| V. まとめ | 124 |

I. 位置と環境

吹田市の地形を概観すると、その北側と南側とで大きく分かれる。市域の北側約3分の2については千里丘陵が占め、その南側に平野部が広がっている。千里丘陵は、鮮新世末から更新世前半にかけて古大阪湾・古大阪湖に堆積した土砂が隆起して形成されたもので、吹田市出口町付近を南端部として茨木市・吹田市・豊中市・箕面市にわたって広がる。概して丘陵の西側で傾斜が急で、東側で緩やかとなり、吹田市内では、標高80m以下のなだらかな丘陵地となっている。また、市域東側では丘陵縁部に沿って標高10~20mほどの台地状の地形（岸部・千里丘台地）がみられる。

市域南側に広がる平野部は、主に完新世以降、神崎川や淀川などの河川による沖積作用によって形成されたものである。吹田市史の地形区分によると、千里丘陵の南端部付近から東側平野部を安威川低地、西側平野部を神崎川低地としている。これらは全般的に軟弱な地盤となるが、安威川低地側の一部において、やや締まった粘土層が比較的浅い深度で認められる。そして、そうした地点に位置する高城遺跡と目俤遺跡では旧石器が出土しており、この粘土層が完新世より以前に起源をもつ可能性も考えられる。しかし、その形成時期は現時点では明確でなく、ここでは安威川低地といわれる中にやや締まった地盤もあるということを記しておく。

この他、安威川低地と神崎川低地の中間にあるJR吹田駅付近から南側にかけては、縄文海進時に潮流によって運ばれた砂が堆積して形成された吹田砂堆が広がる。吹田砂堆は市域南側の平野部にあって微高地となっており、早い時期から人々の活動があったようで、砂堆上にある高浜遺跡では、縄文時代中期の船元式土器の破片が検出されている。

さて、本書で報告する藏人遺跡は、弥生時代から中世にかけての集落遺跡であり、神崎川低地上の豊津町・江坂町2・3丁目に広がっている。藏人遺跡は、これまでの発掘調査によって軟弱な河川堆積物上に展開していることがわかっているが、ここでの堆積土の層序は非常に複雑で多層に及んでおり、近隣の調査においてもその対比が困難であることが多い。これについては、現在の藏人遺跡西側を流れる高川をはじめとする河川の氾濫を頻繁に受けたためであると考えられる。そして、発掘調査では、流水とともに土砂の堆積や流路跡等が認められる地点が多い。

ここで、藏人遺跡が位置する神崎川低地を中心とする遺跡の動向を概観すると、まず縄文時代以前では、神崎川低地上で確認される遺跡は少ない。垂水遺跡は、千里丘陵部から南側の平野部にかけて広がるが、丘陵部で旧石器・縄文時代の石器類が確認されているものの、平野部における当該期資料の出土はこれまでのところない。また、豊崎郡条里遺跡においては、縄文時代後期の土器片が出土している。しかし、これは原位置をとどめたものではなく、二次的な堆積によるものであり、現時点では、神崎川低地上で一次的な堆積による明確な当該期資料の出土をみる遺跡は確認されていない。

次に弥生時代になると、当該期資料の出土をみる遺跡は一気に増す。主要な遺跡を上げると、

藏人遺跡・垂水遺跡・垂水南遺跡・五反島遺跡・榎坂遺跡などがある。

藏人遺跡では、これまでのところ弥生時代の明確な遺構の検出はないが、本報告にあるように、弥生後期を中心とする多数の遺物が出土している。垂水遺跡では、弥生時代前期から後期にかけての遺物の出土があり、その盛期は後期にあると考えられている。これまでの発掘調査では、千里丘陵上において建物跡等が検出されており、従来より弥生時代の高地性集落として知られてきたが、近年の発掘調査では丘陵の南側に広がる低地部においても弥生時代の遺構・遺物が確認され、低地部における弥生集落の展開にも注目されるようになっている。

この他、榎坂遺跡では、弥生時代後期を中心とする遺物とともにピットや土坑などが検出されている。また、五反島遺跡では、古墳時代・中世の河道内からではあるが、弥生後期の遺物が数多く出土しており、周辺に弥生集落が存在したことが推測されている。さらに、垂水南遺跡においても、古墳時代の河道埋土に混入する形ではあるが、弥生中期から後期にかけての遺物が多数出土している。

次に古墳時代になると、藏人遺跡・五反島遺跡・垂水南遺跡などで当該期の遺構・遺物の出土が多くみられる。藏人遺跡では、流路跡や落ち込み等の遺構が検出されており、本報告にあるように、古墳前期から中期を中心とする遺物が多く出土している。五反島遺跡では、古墳時代の河道路が検出されているが、河道内からは古墳前期から後期にかけての遺物が多数出土しており、鉄剣や瑪瑙製勾玉などの特異な遺物も出土している。垂水南遺跡では、これまでに竪穴式住居跡や水田畦畔、河道路などが確認されているが、滑石製品の未製品が数多く出土していることから、滑石製品製作工房が存在したことが考えられている。さらに、フイゴ羽口や鉱



第1図 藏人遺跡及び周辺主要遺跡分布図 (1:30,000)

滓、焼土坑など鍛冶関連資料の出土も注目される。櫻坂遺跡では、建物跡の復元までには至っていないが、柱穴や井戸、河道跡等が検出されるとともに数多くの遺物が出土している。また最近になって、垂水遺跡においても古墳時代の良好な資料が得られるようになっており、特に注目すべきは、丘陵の直下において溶解痕のある4世紀代の銅鏡片の出土がある。これは造構にともなっての出土ではないが、溶解途中の鏡片としてたいへん珍しく、その意味解釈や位置づけに議論を要する資料となっている。

さて、古墳時代より以降になると、吹田を見渡した場合、市域東部の岸部地域において奈良時代の後期難波宮の瓦を生産した七尾瓦窯跡が重要な遺跡として上げられるが、神崎川低地側では、櫻坂遺跡において奈良時代の銅製丸柄や瓦などが出土し、藏人遺跡でも少量ながら奈良時代の遺物が出土しているものの、当該期の明確な造構の検出には至っておらず、その動態には不明な点が多い。そして、神崎川低地において遺跡の展開が顕著に認められるようになるのは平安時代になってからである。

吹田は、奈良時代末の三国川の開削により三国川と淀川が繋がり、京と瀬戸内とを結ぶ水上交通の中継地となり、平安時代にはその地理的立地から栄えることとなる。五反島遺跡では、平安時代前期の河道跡や堤防跡が検出されるとともに大量の遺物が出土している。そこでは、唐式鏡をはじめとする祭祀色の濃い遺物の出土が多くあり、当該期の五反島遺跡については祭祀的性格を有するものと考えられている。

また、吹田では、平安時代以降、荘園の経営が活発に行われるようになる。神崎川低地側においては東寺領垂水莊や春日社領垂水西牧などが展開した。垂水南遺跡では、「垂庄」・「中庄」などと書かれた平安時代初期の墨書き土器が出土しており、成立当初の垂水莊との関連が考えられている。さらに、岸部地域で平安宮への瓦供給のため操業された吉志部瓦窯跡の瓦が出土していることでも注目される。また、櫻坂遺跡では、綠釉陶器や灰釉陶器、白磁、青磁、瓦、製塩土器、水晶などの特異な遺物が多く出土しており、平安時代中期を中心とする柱穴や井戸、溝などが検出されている。さらに、平安時代から中世にかけての土層内からは多くの牛馬の骨が出土している。これらの出土遺物から考えると、当該期の櫻坂遺跡は、一般的な集落遺跡とはやや様相を異にしており、先述した奈良時代の遺物とも鑑みると寺院の存在が推測されるが、牛馬骨の出土をみると、垂水西牧との関連も考えられる。

藏人遺跡は、平安時代末の史料にみられる垂水莊の莊域の北部に位置している。藏人遺跡では、平安時代の遺物として綠釉陶器や青磁、白磁などの出土もみられるが、これまでの発掘調査では、鎌倉時代から室町時代にかけての集落や耕作に関わる造構・遺物が顕著に認められている。そして、藏人遺跡と垂水莊との関係をみた場合、藏人遺跡が所在する地点は、1403年の「春日社領櫻坂郷名主百姓等申状案」にその名が初出する、垂水莊の集落である「藏人村」が展開した地域となり、藏人遺跡で検出されている中世の造構・遺物については、この「藏人村」に関連するものと考えられている。また、藏人遺跡で確認されている平安時代末以降の畦畔や耕作溝については、藏人遺跡が展開する豊嶋郡条里の地割方位（ほぼ南北軸）に合うことが確

認されており、さらに、桜坂遺跡や垂水南遺跡においても中世の遺構面で条里地割に合う溝が多数検出されている。このことから、中世においては、垂水荘付近一帯の農業経営が条里地割に基づいて行われたことが知られる。

なお、吹田市は、千里丘陵南端の出口町付近を境に、その東側が鳴下郡、西側が豊嶋郡と分かれる。そして、豊嶋郡の東端付近に位置する泉町2丁目の吹田市文化会館の建設にあたって実施した発掘調査では、豊嶋郡条里の東限にあたる鎌倉時代の南北方向の大溝がみつかり、豊嶋郡条里遺跡として周知されるに至っている。

このように、平安時代より中世にかけての神崎川低地における遺跡の動向をみると、それらは、莊園経営や条里に関連したものが多いといえる。

II. 調査に至る経過

今回の発掘調査は、藏人遺跡の包蔵地内にあたる当調査地において、共同住宅の建築が計画されたことを契機とする。

調査は、まず平成7（1995）年10月12・13日及び平成8（1996）年1月24・26日に、トレーナーを8か所（計22m²）設定して、遺構・遺物包蔵の有無の確認調査を行った。その結果、古墳時代から中世かけての遺物が検出されるとともに、少なくとも5面以上の遺構面があることが

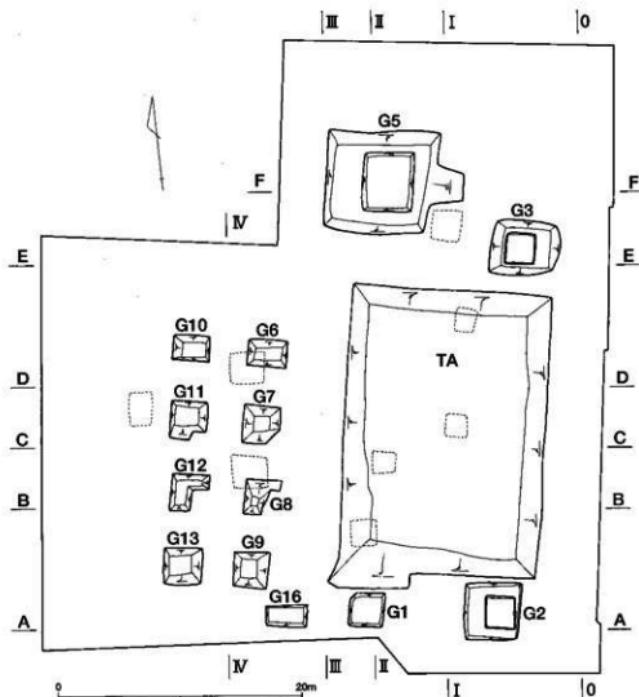


第2図 藏人遺跡第10次発掘調査地周辺図（1：5,000）

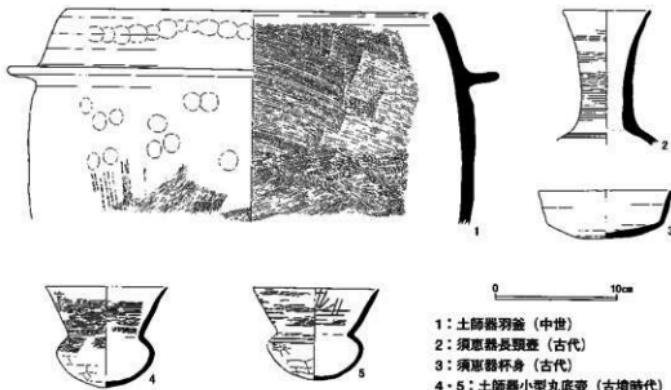
判明した。これにより、予定の建築工事が着手された場合、一部で遺跡が破壊されると判断されたため、その保護措置について建築事業者と協議を行い、工事によって遺跡が影響を受ける範囲を対象に本発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、平成8（1996）年4月18日から8月9日にかけて実施した。調査区は、調査面積最大のものをT（トレンチ）Aとし、その他をG（グリット）1～16として、当初17か所の調査区を設定した。ところが、G14・G15として調査を予定していた箇所については、隣地との近接から安全性の確保が困難であったため、調査を行うことができず、またG4についてもすでに大きく攪乱を受けていたため実質的な調査とはならず、最終的には14か所の調査区を対象に調査を実施した。各調査区の調査面積は次のようになる。

TA : 300m²、G1 : 6 m²、G2 : 85m²、G3 : 4 m²、G5 : 30m²、G6 : 6 m²、G7 : 9 m²、G8 : 55m²、G9 : 8 m²、G10 : 6 m²、G11 : 8 m²、G12 : 5 m²、G13 : 8 m²、G16 : 5.5m²。



第3図 調査区配置図 注) 破線は試掘坑を示す。

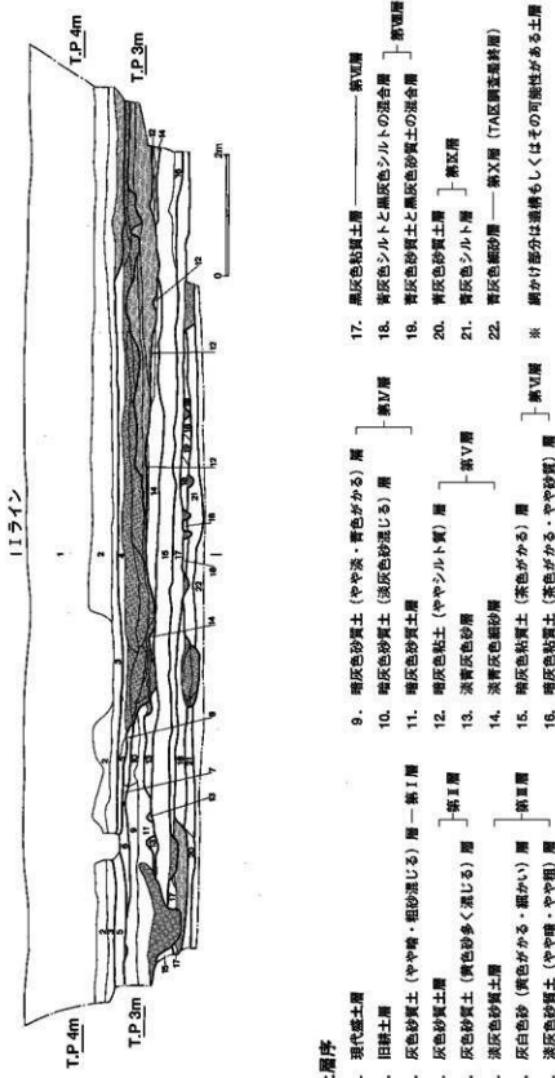


第4図 試掘調査出土遺物実測図

III. TA区の調査成果

(1) 基本土層序

- TA区の土層序は、現代盛土層・旧耕土層以下、大きく10層に分けることができた。
- 第Ⅰ層：やや暗い灰色砂質土に粗砂が混じる土層。中世の遺物を包含し、遺構第Ⅰ面を覆う。
- 第Ⅱ層：灰色砂質土層および、灰色砂質土に黄色砂が多く混じる土層からなる。TA区の北半部に堆積し、中世の遺物を包含し、遺構第Ⅱ面を覆う。
- 第Ⅲ層：淡灰色砂質土層および、やや暗くやや粗い淡灰色砂質土層、黄色がかり細かい灰白色砂層からなる。中世の遺物を包含し、遺構第Ⅲ面を覆う。
- 第Ⅳ層：暗灰色砂質土層および、やや淡く青色がかる暗灰色砂質土層、そして暗灰色砂質土に淡灰色砂が混じる土層からなる。中世および平安時代の遺物を包含し、遺構第Ⅳ面を覆う。
- 第Ⅴ層：ややシルト質の暗灰色粘土層および、淡青灰色砂層、淡青灰色細砂層からなる。中世および平安時代、古墳時代の遺物を包含し、遺構第Ⅴ面を覆う。
- 第Ⅵ層：茶色がかる暗灰色粘土層および、茶色がかりやや砂質の暗灰色粘土層からなる。古墳時代の遺物を包含し、遺構第Ⅵ面を覆う。
- 第Ⅶ層：黒灰色粘土層であり、古墳時代の遺物を包含し、遺構第Ⅶ面を覆う。
- 第Ⅷ層：青灰色シルトと黒灰色シルトの混合層および、青灰色砂質土と黒灰色砂質土の混合層からなる。古墳時代、弥生時代の遺物を包含し、遺構第Ⅷ面を覆う。
- 第Ⅸ層：青灰色砂質土層および、青灰色シルト層からなる。古墳時代、弥生時代の遺物を包含し、遺構第Ⅸ面を覆う。
- 第Ⅹ層：青灰色細砂層であり、遺構第Ⅹ面のベース層となる。



第5図 TA区北壁土層断面図

(2) 遺構・遺物

TA区では、計9面の遺構面を検出することができた。以下では、上位にあたる遺構面および遺物包含層からその状況をまとめる。

a-1. 第I面の遺構

現代の建造物により広い範囲で擾乱を受けていたが、溝やピット、土坑、落ち込みなどが検出された。これらは、おおむね中世の遺構とみられる。遺構面の標高は、おおむねT. P32~3.5mとなる。



写真1 TA区調査風景

[ピット]

P103~P110がN11°Eの方位をもって並び、P104~P109を結ぶライン形が長方形を呈する。このことから、これらのピットが建物跡を構成するものである可能性が考えられるが、柱痕の認められるピットがなく、その深さは4~10cmと浅いこと、また調査区内の擾乱のために削平されたピットも他に存在したであろうことを考慮すると、これらピットの並びが建物跡であるとは即断定できない。ただし、その方位が、次に述べる溝のものと合致する点は、これらのピットが何らかの意図をもって配置されたことを示すものといえる。

[溝]

SD101とSD102が、ほぼ平行して南北方向にのび、その方位はN11°Eを示している。SD101は幅30~70cm、深さ3~8cmを測り、SD102は幅30~65cm、深さ2~7cmを測った。

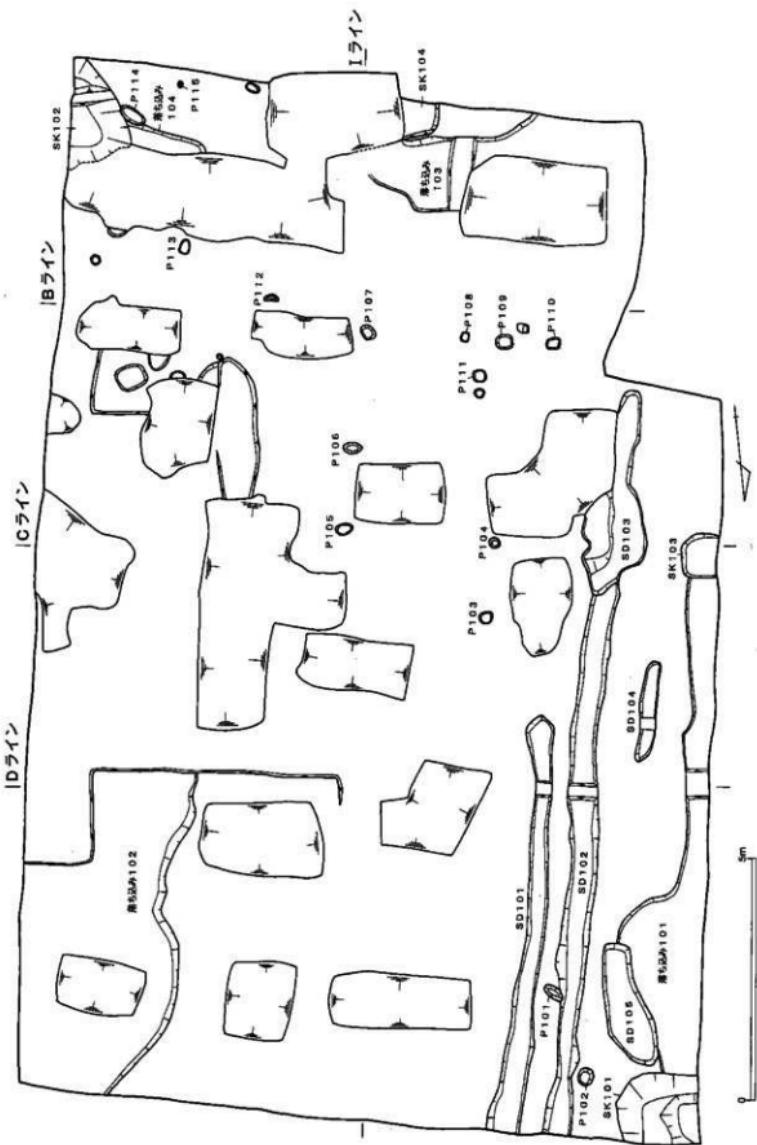
SD102の南端にはSD103が重複する。SD103は平面形がやや不定形となるが前2者と同方位でのび、長さ4.3m、最大幅1.3mを測った。SD101とSD102の埋土は灰色系の砂質土であったが、SD103の埋土は黄褐色の粗砂であり、SD103は流水にともない堆積したとみられる。

SD104は、長さ2.1m、幅35cm、



写真2 TA区第I面（北から）

第6図 TA区第I面平面図



深さ5～9cmを測り、前3者とほぼ同じ方位でのびる。埋土は淡黄灰色の砂質土であった。

S D 1 0 5 は、長さ2.6m、幅0.5～1m、深さ7～10cmを測った。方位はおむねN10°Wを示し、方位は他の溝と異なる。

これらの溝は、底面レベルをみると、溝の両端部の間で顕著な高低差は認められなかった。

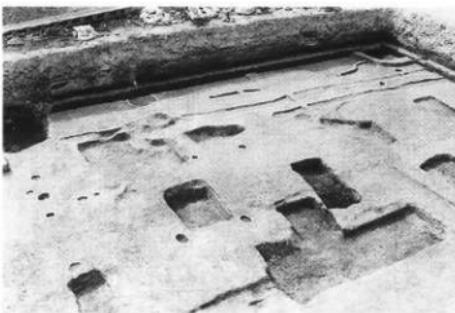


写真3 TA区第I面（東から）

〔落ち込み〕

落ち込み1 0 1 は、調査区西端で西側へ3～9cmほど落ち込む形で検出された。落ち込み肩は一部で大きくふくらむが、方位はおむねN10°Eを示す。埋土は、暗灰色砂質土で砂が多く混じっていた。

落ち込み1 0 2 は、調査区北東で東側へ4～10cmほど落ち込む形で検出された。その落ち込み肩は蛇行するが、おむねN20°Eの方位をもつ。埋土は、やや淡い灰褐色砂質土であった。

〔土坑〕

S K 1 0 1 は、調査区の北西隅で落ち込み1 0 1 に重複して検出された。段を有して掘削され、深さは約45cmを測る。その埋土の主体は暗黄灰色粗砂で、下層部に淡青黄灰色細砂および黒灰色粘土が堆積していた。

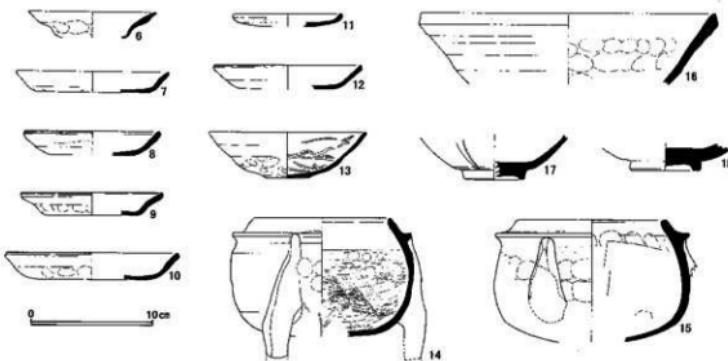
S K 1 0 2 は、調査区の南東隅で検出された。一部攪乱を受けていたが、検出部分で最大長約2.3m、深さ約45cmを測る。その埋土は、上位部に灰色系の砂質土、下位部に砂が堆積していた。

S K 1 0 3 は、落ち込み1 0 1 の南端に重複して検出された。検出部分で径約90cmを測り、深さは8cm程度で、落ち込み1 0 1 とほぼ同じであった。このことから、S K 1 0 3 は、落ち込み1 0 1 と本来一体であるものを別の遺構として認識し検出したものかもしれない。

a-2. 第I層・第I面の遺物

〔第I層出土遺物〕

6～10は、土師器皿である。6は、底部から口縁が外反して上方へ立ち上がり、底部は欠損するがいわゆるへそ皿であると考えられる。7は、口縁部が1段ナデされ外反気味となり、口縁端部は丸くなる。8～10は、口縁部を1段ナデし、口縁端部が面取りされているが、9につ



6~10・13~18: 第I層, 11: SD101, 12: P104

第7図 TA区第I層・第I面出土遺物実測図

いては1段ナデおよび面取りがややゆるい。

13は、瓦器椀である。内面のミガキは粗く、外面にはミガキは施されていない。粗雑に高台が貼り付けられている。

14・15は、瓦器三足釜である。ともに内傾する口縁部の下に短い鍔をもつ。14は欠損した脚1本が残るが、15は剥離して脚部は残存しない。

16は、東播系須恵器こね鉢である。直線的に体部から口縁がのびる。口縁端部は上方へのび氣味となる。内面は指オサエ痕が顕著に残る。

17・18は、青磁椀である。ともに下半部が残存するのみである。高台内は露胎となっている。17の外面には、蓮弁の一部と思われる紋様がみられる。青磁については、この他に図化しなかつたが、第I層内と落ち込み102から破片2点が出土している。

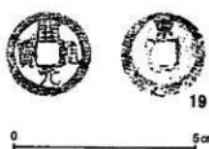
19は、武帝会昌5(845)年初鋤の会昌開元通寶である。背に「京」字がみられる。

この他に、第I層からは、摩滅が著しく図化しなかつたが、軟質で凹面にわずかに布目痕を残す平瓦片などが出土している。

[第I面遺構出土遺物]

11は、SD101から出土した土師器皿である。平坦な底部から短く口縁部がつき、口縁部は横ナデされている。

12は、P104から出土した土師器皿である。口縁部が1段ナデされ、口縁端部が面取りされている。



第8図 TA区第I層出土銭貨

a-3. 第I面のまとめ

第I面では、N11°Eの方位をもってのびる溝を4条検出した。また、それらの溝とほぼ同じ方位をもつピットの並びを確認した。この方位については、蔵人遺跡が所在する豊島郡でとられた条里地割の方位（本報告で基準とする磁北でおおむねN7°30'～9°30'E）とほぼ合うものであり、4条の溝については、条里地割に基づいた農作業等にともない形成されたものであろうと考えられる。また、ピットの並びについても条里地割に何らかの影響を受けたものかもしれない。

さて、第I面の時期であるが、第I層出土の遺物には、6・7のように14世紀中～後半の遺物も含むが、多くは13世紀代を中心とするもので、特に13世紀中～後半を主体とするものであった。また、遺構出土の遺物で図化できたものは少なかったが、11・12の土師器皿にみると13世紀中～後半の遺物が主体を占めており、おおむね13世紀中～後半が第I面の時期に相当すると考えられる。

b-1. 第II面の遺構

調査区の北半部において認められた第II層下で検出された中世の遺構面である。大型の土坑やピットが検出された。遺構面の標高はおおむねT.P3.2～3.4mとなる。

〔土坑・落ち込み〕

当初、SK201と落ち込み201について、1つの落ち込み跡としてとらえて掘削を行った。しかし、掘削を進めるべく一部が土坑状に深くなり、土層断面の状況から、落ち込み201にSK201が重複することが確認できた。

SK201は、長径約4.7m、短径約3.7m、深さ約1.75mを測る大型の土坑である。埋土をみると、暗灰色粘土と黒灰色粘土がブロック状に混じる青灰色砂質土が主体となり、時間をおかず一度に埋められた様相がうかがえる。そして土坑の規模



写真4 TA区第II面SK201掘削風景

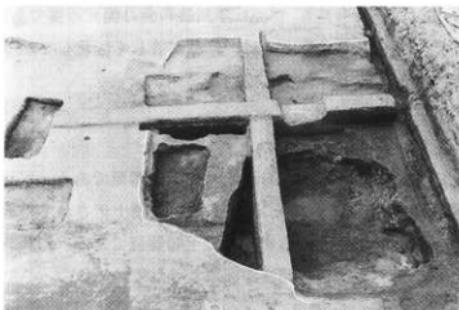
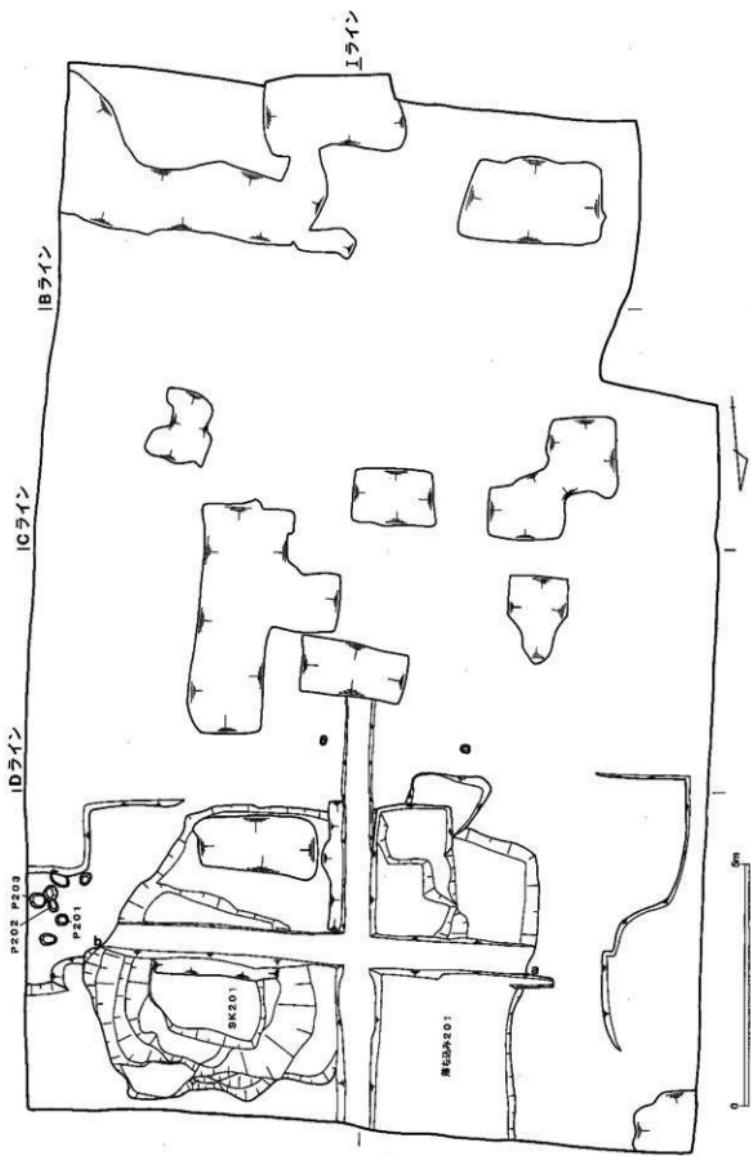
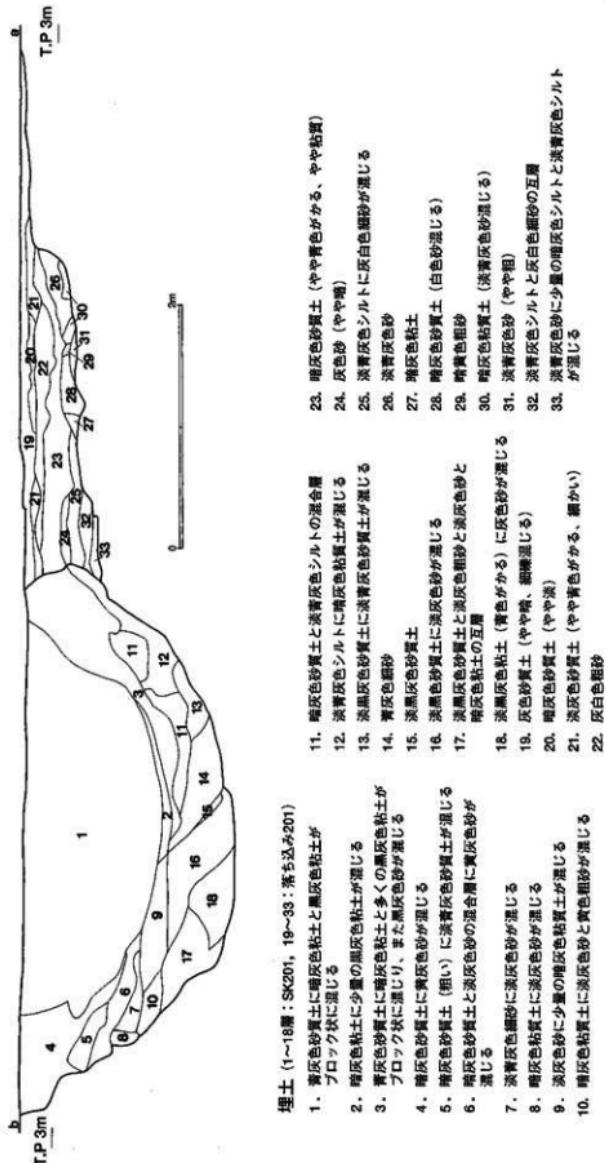


写真5 TA区第II面SK201・落ち込み201（東から）

第9図 TA区第II面平面図

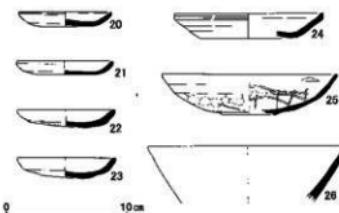


第10図 TA区第II面SK201・落ち込み201埋土



などを考慮すると、SK201は井戸跡であり、おそらくは井戸枠等を取りはずした後に一気に埋め戻されたものと考えられる。

落ち込み201については、肩部で10~15cm程度の深さで落ち込み、SK201にむかって約50cmと深くなる。その埋土は、主に灰色系の砂質土と砂からなっていた。



第11図 TA区第Ⅱ層・第Ⅱ面出土遺物実測図

[ピット]

9基のピットが検出された。その深さは3~6cmと浅く、いずれも柱痕は認められず、規則性をもって並ぶものは確認できなかった。

b-2. 第Ⅱ層・第Ⅱ面の遺物

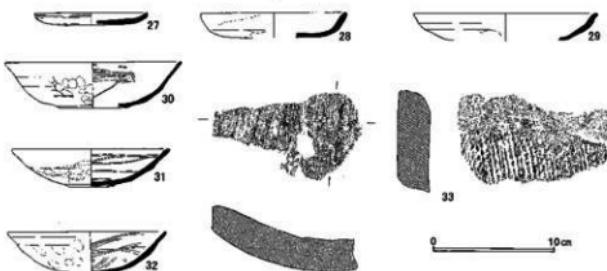
[第Ⅱ層出土遺物]

20~24は、土師器皿である。20・21は、口縁部が1段ナデされ面取りされている。21の面取りはややゆるい。24は、口縁部が2段にナデられ外反気味にのび、さらに口縁端部が面取りされている。22・23は、強く1段ナデされているが面取りはなされていない。

25は、瓦器碗である。内面のミガキは粗く、外面にはミガキは認められない。

26は、青磁碗である。口縁部から体部にかけてが残存する。釉は薄く施されているが、口縁端部は釉がはげたような感じとなっている。

この他、固化しなかったが、白磁口禿の碗か皿の破片1点や須恵質の瓦片1点などが出土している。



第12図 TA区第Ⅱ面SK201出土遺物実測図①

[第II面SK201出土遺物]

27~29は、土師器皿である。27は、口縁部が1段ナデされ面取りされている。28は、1段ナデされているが面取りはない。29は、口縁部が2段ナデされ外反気味にのび、口縁端部は丸みを帯びる。

30~32は、瓦器碗である。ともに内面のミガキは粗く、外面にミガキは認められない。31と32については、炭素を吸着していない部分が広くあり、また胎土に砂粒をやや多く含み、特に31は2~5mm大の砂粒を多く含む。

33は、平瓦である。凹面に布目痕、凸面に繩目タタキ痕を残すが、部分的にナデ消されている。やや軟質に焼き上がり、炭素が吸着している部分は少ない。平安時代のものとみられる。

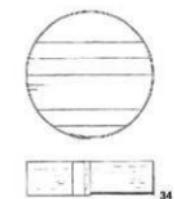
34は、曲物である。出土時点では底板がはまっていたが、取り上げと同時に形が崩れてしまったため、図は復元略測図である。

35は、竹製の編み物であるが、これも周りの土を除去すると形が崩れる状況であったため、土ごと保存処理を行ったことから、これが袋状となるものだったのか平面的な形状のものだったのかについて確認し得なかつた。

この他、図化しなかったが、SK201からは、青磁碗片や古瀬戸とみられる灰釉皿片などが出土している。

b-3. 第II面のまとめ

第II面は、調査区北半部において確認され、井戸と考えられるSK201と落ち込みを検出することができた。第II層包含層中の遺物をみると、おおむね13世紀中~後半に相当するものが多い。また、SK201出土の遺物については、32の平安時代の瓦や、28の土師器皿のように12世紀末~13世紀初頭頃のものもみられるが、主体となる土師器皿・瓦器碗



第13図 TA区第II面SK201
出土遺物実測図②



写真6 TA区第II面SK201出土曲物



写真7 TA区第II面SK201出土編み物

等では、13世紀中頃を前後するものとなる。おそらくSK201が最終的に埋め戻された時期は、13世紀中頃を少し過ぎたあたりではないかと考えられる。また、落ち込み201についてもSK201に切られることから時期が若干遅るものと考えられる。

c-1. 第Ⅲ面の遺構

中世の遺構面で、井戸や溝、自然流路、落ち込みなどが検出された。遺構面の標高は、おおむねT. P2.95~3.1mとなる。

[溝・自然流路]

SD301は、不定形な平面形をもつて東西方向にのびる自然流路である。最大幅約2.5m、深さ約45cmを測った。埋土は灰色系の砂で、流水にともない堆積したものと考えられる。また、SD308（深さ2~5cm）・SD309（深さ30~35cm）・SD310（深さ約20cm）についても平面形がやや不定形で、粗い砂が埋土として堆積し、これも自然流路の一部であると考えられる。

SD302は、長さ約6m、幅15~70cm、深さ1~4cmを測った。埋土は灰白色細砂を主体とし、暗灰色細砂や暗灰色粘質土が混じる。底面レベルでは、南北両端間で顕著な高低差は認められなかった。SD302は、N10°Eの方位をもつて南北方向にのびるが、これとはほぼ同じ方位でのびる溝としてSD303~SD305、SD311~SD314があった。

SD303は、長さ約90cm、幅約20cm、深さ約5cmを測り、黄色がかる灰色砂質土を埋土としていた。SD304は、長さ約1.55m、幅約35cm、深さ2~6cmを測り、灰白色細砂を埋土としていた。SD305は、長さ約1.55m、幅約25cm、深さ4~6cmを測り、やや粗い淡黄灰色砂を埋土としていた。SD311は、長さ約1m、幅約15cm、深さ約3cmを測り、やや淡い灰色砂を埋土としていた。

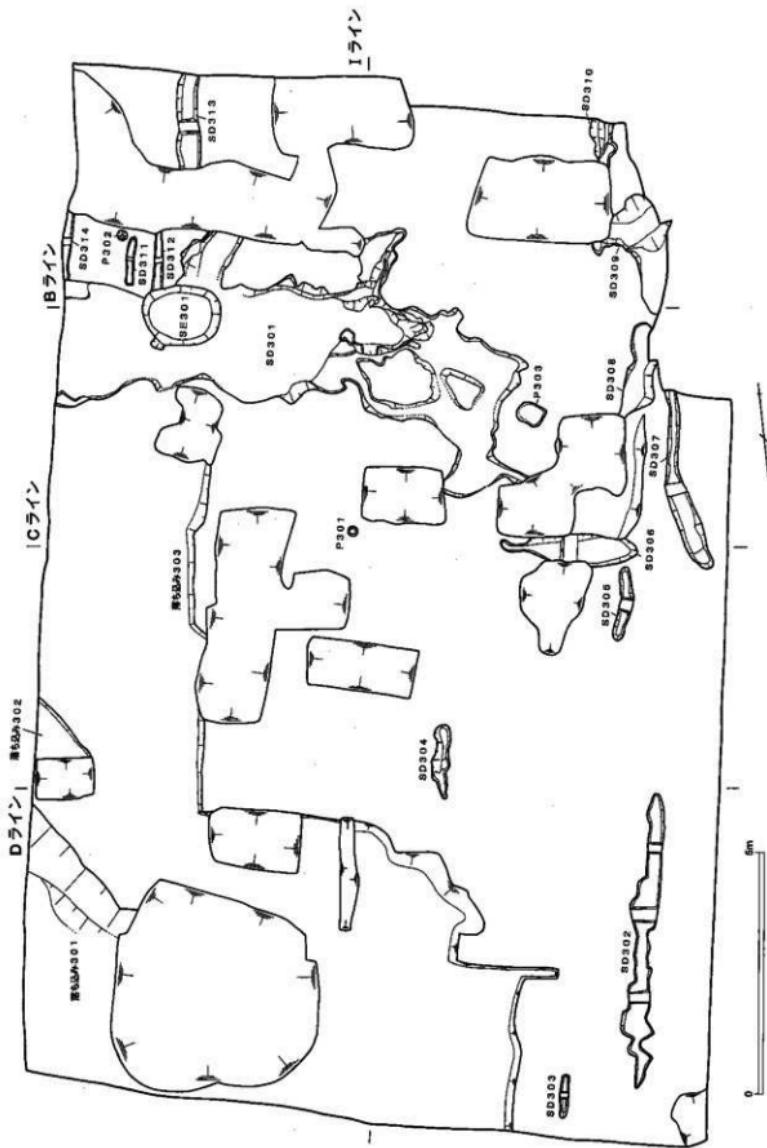
SD312は、その北側をSE301に切られる形で認められた。埋土は細緻の混じる淡黄灰色粗砂で、幅約20cm、深さ約5cmを測った。SD313は、幅40~50cm、深さ約13cmを測り、灰色の砂礫を埋土とした。SD314は、調査区東壁にかかる形でその西半部を検出した。埋土は淡灰色細砂で、深さは検出部で7cmを測った。

この他、SD306は、N81°W(N9°E)の方位をもつて東西方向にのび、長さ2.85m、検出幅70cm、深さ8cmを測り、黄灰色粗砂を埋土



写真8 TA区第Ⅲ面（北から）

第14図 TA区第三面平面図



としていた。またSD307は、N6~13°Eの方位でやや曲がりつつ南北方向にのびる。幅20~50cm、深さ約9cmを測り、黄灰色砂が混じる暗灰色砂質土を埋土としていた。

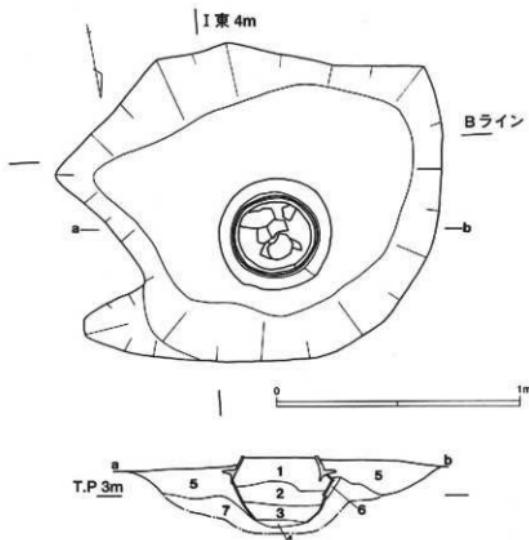
[井戸]

SE301は、SD301に重複する形で検出された。長径約1.6m、短径約1.25mの梢円形を呈し、深さ約30cmを測り、その中央に底部を穿たれた瓦器羽釜が据えられていた。井戸掘り方の埋土は暗灰色砂質土および灰色砂が認められ、羽釜内には主に灰色砂の堆積が認められた。

なお、羽釜表面には煤がかなり付着しており、使用後に井戸枠として転用されたものと考えられる。また、SE301は、本来的に第3面よりも上位部から掘り込まれていたものと考えられ、後世の削平により井戸の底部だけを残す形になったとみられる。また、SE301を設置するにあたっては、結果的に湧水の得やすい旧流路であるSD301上を選定したものと考えられる。

[落ち込み]

落ち込み301と落ち込み302は、調査区北東側で検出され、落ち込み肩はN35°Wの方位をもつての



第15図 TA区第3面SE301平面図・断面図



写真9 TA区第3面SE301

び、落ち込み301は約20cm、落ち込み302は約4cmの深さで北東側へ落ち込んでいた。

落ち込み303は、やや屈曲しつつ南北方向に落ち込み肩のがび、全体的にはN8°Eの方位を示し、東側へ4~11cmの深さで落ち込んでいた。

c-2. 第III層・第III面の遺物

[第III層出土遺物]



写真10 TA区第III面SD301・SE301付近 (東から)

36は、土師器皿である。口縁部が1段ナデされ、ゆるく面取りされている。37・38は、瓦器碗である。ともに内面のミガキはやや粗く、外面にミガキは施されていない。37の外面下半は指オサエの後ナデられているが、38についてはほとんど指オサエのままで調整が終わっている。

39は、縁釉陶器の椀か皿の底部である。高台の復元径は5.8cmを測る。素地はやや硬質で明るい灰色となり、釉は明るい淡緑色で薄くかかる。小さい破片のためにその全形は明らかでないが、削り出しによる蛇の目高台か円盤状高台である。

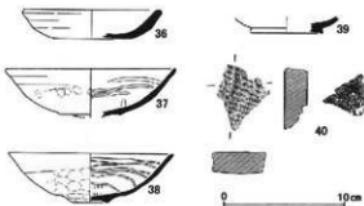
40は、平瓦である。須恵質に焼き上がり、凹面に布目痕が残り、凸面はナデされている。胎土中に1.5cm大の礫を含む。平安時代以前のものか。瓦では、この他に、圓化しなかったが、凸面・凹面ともナデ調整により繩目痕や布目痕などは認められない須恵質の丸瓦片1点が出土している。

[第III面遺構出土遺物]

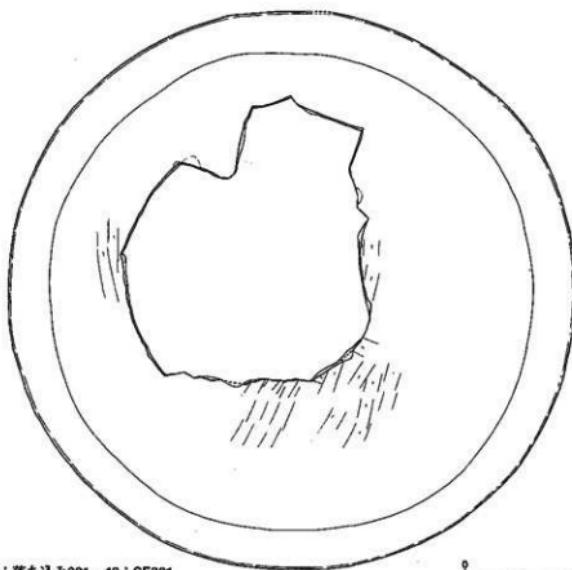
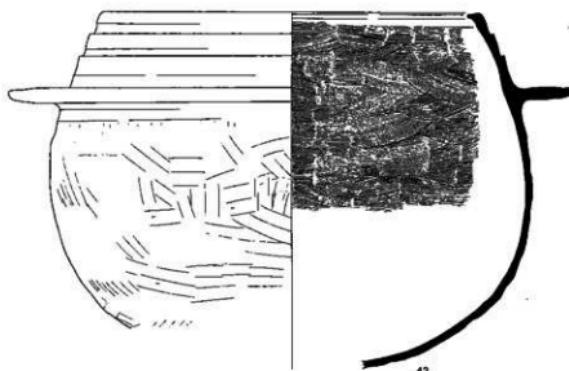
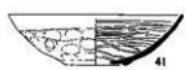
41は、SD301出土の瓦器碗である。内面のミガキはやや粗く、外面にミガキは施されていない。外面に接合痕が大きく残る。

42は、落ち込み301出土の土師器釜である。口縁部のすぐ下に幅の狭い鍔がめぐる。体部外面には縦方向のハケ調整が認められる。

43は、SE301の井戸枠として転用された瓦器羽釜である。口縁部は内傾して外面に段を有し、球状の体部をもつ。内面はハケ調整され、外面は煤付着のため観察しづらいが、板ナデおよび部分的にケズリ調



第16図 TA区第III層出土遺物実測図



0 10cm

41 : SD301, 42 : 落ち込み301, 43 : SE301

第17図 TA区第III面出土遺物実測図

整が認められる。底部は穿たれている。

この他、摩耗が著しいため図化しなかったが、落ち込み303内から、軟質で凸面に格子目タキとみられる痕跡を残す平瓦片などが出土した。

c-3. 第III面のまとめ

第III面では、SD302をはじめとして、N10°E前後の方位をもって南北方向もしくはそれに直交する方向でのびる溝を10条検出した。また落ち込み303の落ち込み肩もほぼ同方位でのびていた。これらの方位は第I面検出の溝と同じく条里地割の方位におおむね沿うものであり、これらも条里地割の影響のもと形成されたものと考えられる。

また、ここでは自然流路SD301に重複して井戸SE301が検出された。SD301出土遺物には13世紀前半～中頃にかけてのものがみられたが、SE301の瓦器羽釜は14世紀前半のものとなる。このことから、SE301は14世紀代に設置され、後世の削平により井戸底部だけが残存して第III面で検出されたものと考えられる。ただし、SE301の設置時期が14世紀代と考えると、第III面上位の第I面の時期よりも下ることになる。このことから、このSE301については、おそらく第I面の精査段階で表出してはいたが、それを認識できずに第III面で検出したものと考えられる。

さて、第III面の時期であるが、第III層や遺構内からは平安時代の遺物や、またSE301のようにやや時代の下るものがあるが、全体的にみると、SD301のように13世紀前半から中頃の遺物を主体に伴う遺構が多く、おおむねは13世紀前半～中頃が第III面の時期に相当すると考えられる。

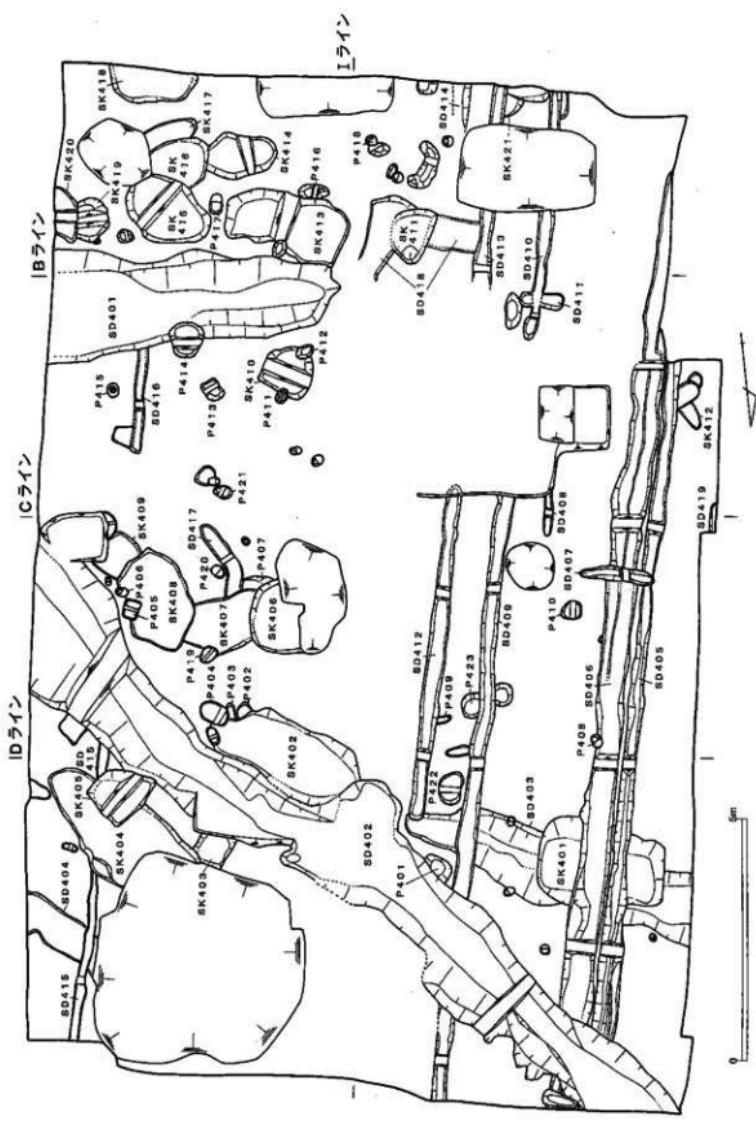
d-1. 第IV面の遺構

平安時代後期～中世にかけての遺構面で、溝や自然流路、土坑、ピットなどが検出された。遺構面の標高は、おおむねT.P2.75～3.0mとなる。

【溝・自然流路】

SD401・SD402は自然流路である。SD401は、灰色系の砂を埋土の主体としていた。N86°W(N4°E)の方位で東西方向にのび、幅は最大で約2.35m、深さ約35cmを測った。このSD401については、第III面検出のSD301のちょうど下位、ほぼ同位置にて認めることができた。そしてSD301とSD401はほぼ同様の砂を埋土の主体とするものであり、さらにもう一つ出土遺物についてもほぼ同時期のものであった。このことから、SD401は、SD301の下層部を掘り残し、それを第IV面で改めて確認したものであるとみられる。また、SD401に重複する形で検出されたP414についても、元はSD301の部分的な窪みであったものと考えられる。

SD402は、北西から南東方向にかけてのび、その方位はおおむねN45°Wを示し、幅



第18図 TA区第IV面平面図

1.1~2.7m、深さ25~60cmを測った。埋土は灰白色砂を主体としていた。流路の底面レベルをみると、その南東隅でT. P2.55m、北西隅でT. P2.45mと10cmほど低くなり、北西方向に水が流れていたとみられる。しかし、その上端レベルをみると、南東隅の方が20cmほど低くなる。このことから、SD 4 0 2 の本来の流路肩はもう少し上位にあったが、後世の削平により上端が削られ、上端レベルと底部レベルとの高低差に齟齬が生じたものと考えられる。

この他、SD 4 0 1 のすぐ西側で検出されたSD 4 1 8 (深さ約10cm)についても、その埋土は暗黄灰色粗砂で流水にともなってのものとみられる。また、調査区北東隅で検出されたSD 4 0 4 は、幅約75cm、深さ約5cmを測り、N53°Wの方位をもってのびていたが、埋土が黄灰色砂

であり、これらも自然流路の一部であると考えられる。

なお、SD 4 0 3については、最大幅1.4m、深さ11~27cmを測り、おおむねN68°Wの方位をもって東西方向にのび、埋土はやや粗く褐色がかった灰白色砂であり、これも流水にともなってのものと考えられる。ただし、このSD 4 0 3については、実際は下位面の第V面の溝が第IV面段階で検出されたものと考えられ、それについては次節で述べる。

さて、第IV面では、この他に、ほぼ同じ方位でのびる溝 (SD 4 0 5~SD 4 1 6) が多数検出された。その方位はN13°Eを示し、南北方向またはこれに直交する形でのびていた。

SD 4 0 5 と SD 4 0 6 は、3~15cmほどの間隔をあけて平行して南北方向にのびていた。SD 4 0 5 は幅15~50cm、深さ5~20cmを測り、埋土は暗灰色砂質土、一部下層に暗灰色粘土がみられた。SD 4 0 6 は幅55~75cm、深さ9~16cmを測り、埋土は暗灰色砂質土であった。両者とも底面レベルが南北両端間で顕著な高低差は認められなかった。

SD 4 0 9 と SD 4 1 0 、 SD 4 1 2 と SD 4 1 3 、 SD 4 1 5 と SD 4 1 6 については、それぞれ間があいているが、おそらく元は一続きの溝であったと考えられる。SD 4 0 9 と SD 4 1 0 については幅20~45cm、深さ4~11cm、埋土はSD 4 0 9 で暗灰色砂質土、SD 4



写真11 TA区第IV面 (北から)



写真12 TA区第IV面北半 (東から)

10で暗灰色粘質土であった。SD412とSD413については、幅25~40cm、深さ4~8cm、埋土はSD412で暗灰色砂質土および下位部に暗灰色粘質土、SD413で暗灰色粘質土であった。SD415とSD416については、幅10~25cm、深さ2~7cm、埋土はSD415で白色砂が混じる暗灰色砂質土、SD416で灰色砂が混じる暗灰色粘質土であった。そして、これらの底面レベルをみると、SD409とSD410、SD412とSD413については、南北間で顯著な高低差は認められなかつたが、SD415とSD416については、SD416の底面レベルがSD415よりも5cm前後低かった。

この他、SD407やSD408、SD411、SD414、SD419などは部分的に検出された溝であるが、これらも前記の溝と同様の方位でのび、埋土も暗灰色粘質土を主体としたものであった。

さて、これら南北方向・東西方向にのびる溝は、おそらく農作業にともない形成されたものと考えられるが、水が常に流れていた痕跡は認められず、配水を目的としたものではないようである。

なお、SD417については、幅30cm、深さ2~6cmを測り、1cm以下の礫が混じる暗灰色粘質土が埋土であったが、その方位は他の溝とは異なりカーブしてのび、その形成過程は他の溝と異なる可能性がある。

[土坑]

大型の土坑が多数検出された。その平面形はややいびつな楕円形を呈するものが多く、また2か所においてやや密集して検出された。

SK401は、SD405とSD406に切られる形で検出された。長径約2.6m、短径約1.85m、深さ約27cmを測り、長径軸の方位はN77°Wであった。埋土は上層に暗灰色の砂質土~粘土、下層に灰白色砂が堆積していた。

SK402は、SD402にその北側部分が切られる形で検出された。検出部分で長径3.1m以上、深さ約20cmを測り、長径軸の方位はN55°Wであった。灰白色砂が混じる暗灰色砂質土が埋土の主体となり、下層に暗灰色粘土と灰白色砂の混合層が認められた。

SK404は、第Ⅱ面SK201によって西側が擾乱を受けていた。検出部分で長径3m以上、短径約1.7mを測り、長径軸の方位はN45°Wを示していた。黄灰色砂が混じる暗灰色砂質土が埋土であった。

さて、調査区中央の東よりにおいては、SK406~SK409が重複する形で検出された。大きな重複や擾乱をのがれ、おおよその全形が認められたのはSK408のみで、長径約2.2m、短径約1.3m、深さ約4cmを測り、長径軸の方位はN10°Wを示し、その埋土は暗灰色砂質土で細礫が混じっていた。また、SK407(深さ約6cm)とSK409(深さ約7cm)についても暗灰色砂質土が埋土の主体となり、SK406については、深さ約10cmを測り、埋土は暗灰色粘質土であった。

調査区南東部においては、SK 4 14～SK 4 17が重複して検出された。ここで全形が認められるものはなかったが、SK 4 14とSK 4 15についてはおおよその形が認められた。SK 4 14は、東端部がSK 4 16によって少し切られるが、長径が1.4mを少しこえる程度と推測され、短径は約1m、深さ約15cmを測り、長径軸の方位はほぼ西北と直交していた。SK 4 15は、長径

1.8m程度、短径約1.35m、深さ約13cmを測り、長径軸の方位はN47°Wであった。これらの埋土をみると、SK 4 14では上層に暗灰色砂質土、下層に1cm程度の礫が混じる黄褐色粗砂が堆積していた。SK 4 15では暗灰色砂質土を主体とし、黄灰色砂が混じっていた。SK 4 16（深さ約18cm）とSK 4 17（深さ約14cm）については暗灰色粘質土が埋土として認められ、SK 4 17では粗砂が混じっていた。

また、上記の4土坑と重複するものではないが、大型のSK 4 13とSK 4 18がそのすぐ脇にみられた。SK 4 13は、その北西端をSD 4 0 1にわずかに切られていたが、長径約2.4m、短径約1.2m、深さ約15cmを測り、長径軸方位はN70°Wを示していた。埋土は黄灰色砂が混じる暗灰色砂質土であった。SK 4 18は調査区南端にかかるて全形は明らかでないが、検出部で径1.85m、深さ約20cmを測り、埋土は砂粒の割合が多いやや黒色がかる暗灰色砂質土であった。

この他、上述の土坑に比べてやや小型のもの（SK 4 0 5、SK 4 1 0、SK 4 1 1、SK 4 1 9など）も検出された。これらは13～20cm程度の深さを測り、埋土は暗灰色砂質土もしくは暗灰色粘質土を主とするものであった。

さて、ここで検出された土坑であるが、特にその大きさや方位などに規則性は認められず、その性格は明確でない。ただし、SK 4 0 3とSK 4 0 4をみると、その長径軸方向がSD 4 0 2に沿うような様相で認められた。これら土坑のいくつかは地形的な条件に影響されて形成された可能性もあると考えられる。

[ピット]

建物跡や杭列などとして明確に復元できるものはなかったが、P 4 1 9～P 4 2 1が約1.7mの間隔でN12°Eの方位をもって並ぶのが確認された。これらのピットにおいては柱痕は認められず、P 4 1 9とP 4 2 1が深さ約7cm、P 4 2 0が約3cmと浅いことから、これらが建物跡や杭列などの一部であるかの判断は難しい。ただし、方位がSD 4 0 5等をはじめとする



写真13 TA区第IV面南半（北東から）

南北溝とほぼ合致することから、P 419～P 421が、それら溝と何らかの関連をもって形成された可能性が考えられる。

また、P 401とP 422、P 423についても約1.7mの間隔でN18° Eの方位をもって並ぶのが認められた。これも柱痕は認められず、P 401で深さ約7cm、P 422とP 423で約4cmと浅かった。また、方位が南北溝よりやや東に傾いており、P 423がSD409に切られていたことからも、これらのビットの形成と南北溝とは関連が薄いのではないかと考えられる。

なお、上記のビットの埋土については、P 401とP 420が暗灰色粘質土を埋土とし、他については暗灰色砂質土を主とするものであった。

d-2. 第IV層・第IV面の遺物

[第IV層出土遺物]

44は、土師器杯である。口縁部は横ナデされ、口縁端部内面に沈線が入る。底部外面は指オサエの後ナデ調整されている。ヘラミガキは施されていない。

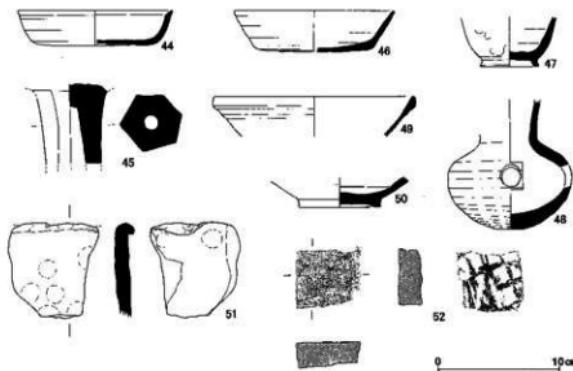
45は、土師器高杯の脚部である。6面に面取りされ、内側は残存部分では直線的に1.7cmほどの径で中空となっている。

46は、須恵器杯である。口縁部は回転ナデにより、底部内外面はナデ調整されているが、外側のナデ調整は内面に比べるとやや粗いままで終わっている。

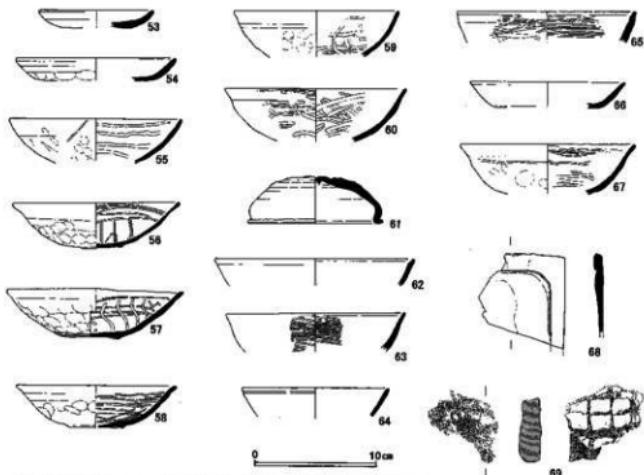
47は、須恵器壺の体部下半部である。回転ナデ調整されており、底部には高台が貼付けられているが、回転糸切り痕が残る。

48は、須恵器壺である。体部外面下半から底部にかけて回転ヘラケズリ、他を回転ナデにより調整している。この壺については、第V面上において第IV面での掘り残しとみられる堆積土より出土したことから、第IV層出土遺物としてここで取り上げた。しかし、他の第IV層出土遺物の時期相からすると、時期が遡るものとなる。

49・50は、白磁碗である。49は口縁部で玉縁を有する。50は底部で高台をケズリ出している。外面



第19図 TA区第IV層・第IV面出土遺物実測図



53~58 : SD401, 59~61 : SD402, 62 : SD405, 63・64 : SD406
65 : SD413, 66 : SK411, 67・68 : SK402, 69 : SK417

第20図 TA区第IV面出土遺物実測図

は残存部分で上部4mm程度まで施釉されているが、それより下は釉がかからない。

51は、製塙土器である。指オサエおよびナデにより粗く成形され、口縁端部は歪みつつ面をもつ。器壁は7~9mmと厚手で、胎土は精良である。

52は、平瓦である。須恵質に焼き上がり、凹面はナデ消され、凸面は格子目タタキ痕が残る。また図化しなかったが、凹面に布目痕が残る玉縁の丸瓦片1点が出土している。

このように、第IV層内においては、奈良時代から平安時代にかけての遺物が比較的多く検出された。ただし、図化できなかったが、外面のミガキが省略されている12世紀後半から13世紀前半にかけての瓦器片など時代の下る遺物も含んでいた。

[第IV面遺構出土遺物]

53~58は、SD401より出土した。53・54は、土師器皿である。ともに口縁部が横ナデされており、54については口縁端部がゆるく面取りされている。また54の胎土には1mm程度の砂粒を多く含む。

55~58は、瓦器碗である。ともに内面のミガキはやや粗く、外面にミガキは施されていない。なお、SD401については、上位面検出のSD301の掘り残し部分であったと考えられ、SD401出土の遺物相とSD301のものはほぼ同様である。

59~61は、SD402より出土した。59・60は、瓦器碗である。59は内面のミガキは粗く、

外面にミガキは施されていない。口縁部は2段に横ナデされている。

60は内外面ともにミガキが施されているが、外面のミガキについてはやや粗くなっている。

61は、須恵器の蓋とみられる。口縁部がくの字状に短く折られ平坦面を作っている。天井部外面は未調整のままとなっている。

62は、SD405より出土した土師器皿である。内外面の調整は摩耗のために不明瞭である。口縁端部内面に沈線に入る。

63・64は、SD406より出土した。63は、瓦器椀である。残存部において内外面とも密にミガキが施されている。口縁端部内面に沈線が入る。

64は、緑釉陶器椀である。須恵質の素地にやや暗い緑色の釉が薄くのる。口縁部外面には沈線が入る。

65は、SD413より出土した瓦器椀である。内外面とも密にミガキが施され、口縁端部内面に沈線が入る。

66は、SK411より出土した土師器皿である。口縁部は横ナデされ、さらに口縁端部が外側に横ナデされている。

67・68は、SK402より出土した。67は、瓦器椀である。内面のミガキはやや粗く、外面にもわずかにミガキが認められる。

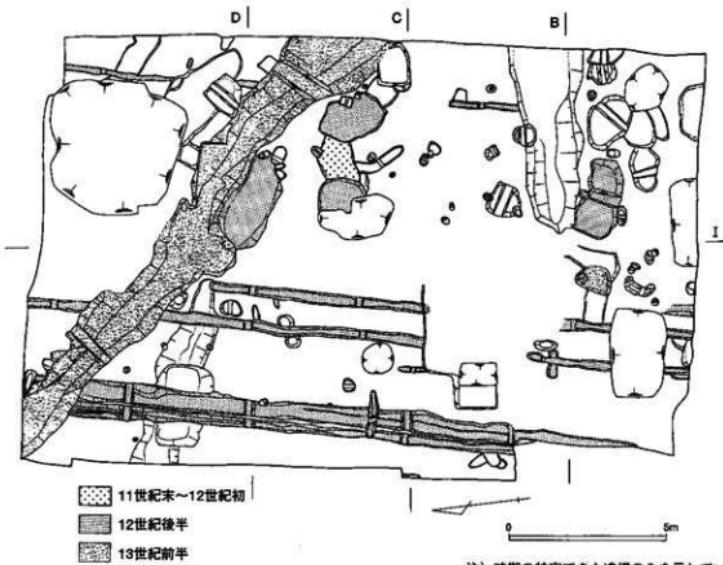
68は、石製硯である。風字硯か台形硯とみられ、硯頭にむかって側面がやすぼまり、また側面は裏面から硯面に向かって広がる。墨堂部分の左部分は表面が剥離してしまっている。また、裏面は硯頭から約3.5cmまで平坦面が残るが、そこから硯尻にかけては剥離のため明確でない。ただし、残存部分の硯尻側の端部でわずかに斜め方向に削られた面が残り、裏面はまったくの平坦面ではなく、削られて加工されていた可能性が考えられる。石材は泥板岩とみられる。

69は、SK417より出土した平瓦である。やや硬質で凸面側は須恵質となる。凸面は格子目タタキ痕がみられ、凹面は激しく摩滅しているがわずかに布目痕が残る。

この他、図化しなかったが、SK412より軟質で灰白色の素地に薄緑色の釉がのる緑釉陶器片1点や、SK401とSK406より軟質の瓦片などが出土している。

d-3. 第IV面のまとめ

第IV面では、SD405をはじめとして、N13°Eの方位で南北方向またはこれに直交してのびる溝を12条検出した。これらの南北溝・東西溝は、第I面・第III面で検出された溝と同じく農作業にともない形成されたものと推測されるが、その方位については、第I面・第III面と比べると2~3°東側へ傾くものであり、想定される豊嶋郡条里の地割方位からもわずかに傾く。これについては、調査区の範囲が限られたものであり、たまたま溝の検出部分が条里地割方位とわずかにずれていたのではないかと考えられ、これらの溝も条里地割の中で形成されたものであろうと考えられる。



注) 時期の特定できた遺構のみを示している。

第21図 TA区第IV面時期概略図

さて、これらの溝の時期については、遺物が出土した溝で下限時期の把握できるものをみると、SD405では黒色土器A類片、SD406とSD413では11世紀末～12世紀初頭にかけての瓦器片（遺物63・65）、SD409では黒色土器A類片とともに瓦器片がみられる。SD409の瓦器片については小さくて詳細な観察できないが、内外面ともミガキはあるがやや粗く、外面下半についてはミガキが省略される12世紀後半の和泉型のものと考えられる。そして、これらの南北溝・東西溝が、関連性をもってほぼ同一時期に形成されたものと考えると、その時期はおおむね12世紀後半とみるのが妥当と考えられる。

また、この溝とほぼ同じ方位をもつピットの並び（P419～P421）が確認されている。ピット内からは遺物の出土がなかったため断定できないが、これらのピットは南北溝と関連性をもって形成されたと考えられることから、これらピットの時期も12世紀後半のものではないかと推測される。また、別のピットの並び（P401・P422・P423）については、南北溝との関連性が薄く、遺物の出土もないことから明確でないが、P423がSD409に切られていることから、南北溝形成以前のものと考えられる。

次に、自然流路に関してみると、SD401は、先述したようにSD301の掘り残しであると考えられ、本来の第IV面段階のものとしては、SD402をはじめとする3条ということ

になるが、これらは条里の方位と合うものではなかった。そして、SD402は南北溝に重複し、他のものは南北溝に切られる形で検出された。SD402からは13世紀前半のものとみられる瓦器片（59）が下限時期の遺物として認められた。また、SD404とSD418からは遺物の出土はなかった。ちなみに、SD403では8世紀末～9世紀初頭のものと思われる須恵器杯片や土師器甕片が認められたが、SD403は、先述したように本来は第V面段階のものであるとみられ、第IV面段階の時期の検討からは除いておく。

この他、土坑では、SK418から平安時代初頭前後のものとみられる須恵器壺片が出土しているが、SK418と同様の他の大型土坑の状況からすると、SK418がその時期のものである可能性は低いと考えられる。時期を把握できる遺物が出土した土坑を上げると、SK402とSK406、SK408、SK413において12世紀後半の所産とみられる瓦器片もしくは土師器皿片が出土しており、SK406とSK407からは11世紀末～12世紀初頭の瓦器片が出土している。また、やや小さな土坑SK411では土師器皿（66）のように8世紀末頃の遺物も出土したが、下限時期のものとしては13世紀前半の土師器皿片と瓦器片が認められた。

このように、土坑を中心にみると、土坑は11世紀末～12世紀初頭のものと、12世紀後半のもの、そして13世紀前半のものがあるようである。そして、この点を他の遺構の時期とも鑑みてみると、先述したように、SD405をはじめとする南北溝・東西溝が12世紀後半であり、自然流路SD403が13世紀前半であるとみられる。このことから、第IV面の遺構は、第III面の掘り残しだあるSD401と第V面段階のものとみられるSD403を除けば、おおむね11世紀末～12世紀初頭、12世紀後半、13世紀前半の3時期のものからなると考えられる。

なお、SK402出土の石製硯については、SK402が12世紀後半のものとみられることから、これも12世紀後半頃の所産であろうと考えられる。

e-1. 第V面の遺構

平安時代末を下限として古墳時代までの遺物を伴いつつ、溝や落ち込みが検出された。遺構面の標高は、おおむねT. P2.6～2.9mとなる。

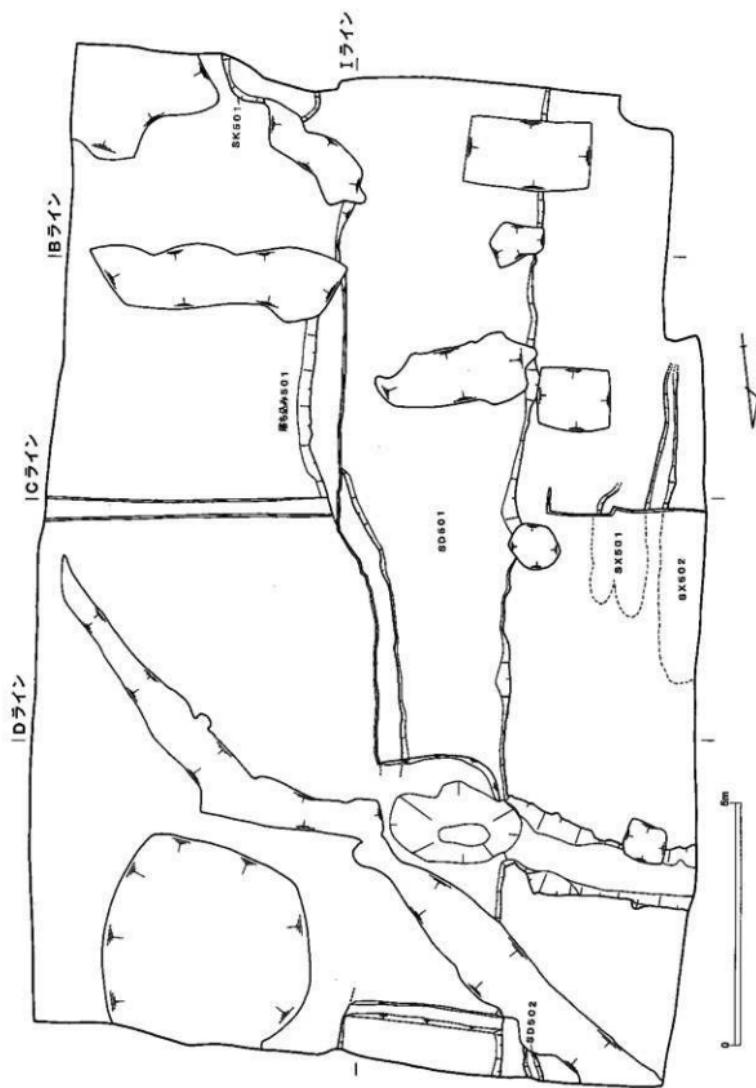
[溝]

SD501は、上位面の遺構により搅乱を受けるなどしてその全形は明らかでないが、南北方向に幅2.1～3.5m、深さ3～20cmをもってのび、調査区北西部付近で幅1～1.7



写真14 TA区第V面（北から）

第22図 TAK50V面平面図



m、深さ14~25cmの東西方向の溝が接してのびていた。そして、南北溝と東西溝が接する部分では深さ30cm程度のくぼみが認められ、このくぼみと東西溝の底面については凹凸が目立ち、おそらくは流水によって浸食された痕跡であろうと考えられる。また、底面レベルをみると、東西溝が南北溝より5~15cmほど深く、方位については、南北溝がN10°E、東西溝はおおむねN74°

Wを示していた。埋土はともに青灰色砂が主体となって堆積していた。

ここでは、南北溝と東西溝との間に重複関係が認められず、一連のものとしてとらえて検出したが、東西溝については流水にともなったものと考えられ、底面が比較的平坦であった南北溝とは性格が異なるようである。

なお、この東西方向の溝については、上位面の第IV面で検出した自然流路SD403とほぼ同位置で確認された。埋土については両者で異なるものの、おそらく、SD403は第IV面段階でSD501東西溝の上端面を認めたものであると考えられる。これについては、後のまとめで述べることにする。

[落ち込み]

SD501の東側においてその東肩部に沿うような形で、落ち込み501が認められた。落ち込み肩で6~14cmの深さで東側へ落ち込み、深い部分で18cm程度の深さを測った。落ち込み内の底面はそれほど凹凸がなくほぼ平坦であり、青灰色細砂と暗灰色シルトが主体として堆積していた。

[畝状遺構]

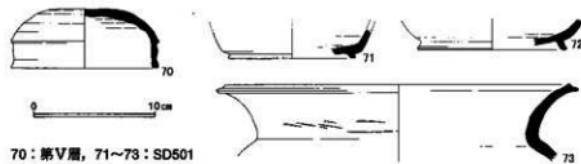
調査区中央の西端で、畝状の様相をもつ遺構が認められた。遺構掘削の前においては、平面的に周辺部と色が若干異なる箇所が観察され、平面形から畝状の遺構ではないかと考えて掘削を行った。ところが、周辺部との土質の違いがはっきりせず、様々な土が混在する堆積をみせ、結果的に畝のような明確な高まりとしては確認できず、SX501とSX502の間に一部溝状のものが残り、平面的に畝状の痕跡として確認するにとどまった。

e-2. 第V層・第V面の遺物

第V層・第V面での出土遺物は少なく、図化できたものは次の5点であった。

[第V層出土遺物]

第V層内では、古墳時代・平安時代～中世の遺物が出土したが、中世の遺物については上位層から

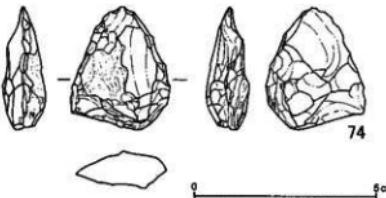


70: 第V層, 71~73: SD501

第23図 TA区第V層・第V面出土遺物実測図

の混入であると考えられる。ここで図化できたのは1点のみである。

70は、須恵器杯蓋である。天井部外面は回転ヘラケズリされているが、その中央部はナデ調整されている。また稜付近から口縁部にかけては回転ナデされ、口縁端面には凹線に入る。稜は短くやや丸みをもつ。



第24図 TA区第V面SD501出土石器実測図

[第V面SD501出土遺物]

71・72は、須恵器杯である。ともに底部の破片であるために細かくは観察できないが、体部は回転ナデ調整されており、底部面の端よりに高台がつくことから、8世紀末～9世紀初頭頃の所産ではないかと考えられる。

73は、須恵器甕である。口縁から頸部にかけては回転ナデされており、口縁端部は回転ナデにより外方へつまみ出されのがびている。また頸部には、意図的なものなのかはわからないが、板状のもので押さえられた痕がつく。体部は残存部分でナデ調整されているが、外面にはタタキ調整の痕跡がわずかに残る。全形が明らかでないので時期をしほるのは難しいが、口縁端部が外方へのびるという特徴で似たものが、兵庫県の札馬47号窯、相野窯跡群の向上・古城1号窯跡や中池ノ内1号窯などでみられる。これらの資料は9世紀後半～10世紀後半に相当するものであり、73もその範囲に入るものであろうか。

74は、サヌカイト製スクレイバーである。左側縁を表面からの剥離により刃をつけ、右側縁から基部にかけては両面からの剥離によって調整されている。風化程度が浅く弥生時代のものと考えられる。

e-3. 第V面のまとめ

第V面では、溝、落ち込み、畝状造構が検出された。造構内および第V層からの遺物は時代幅が広い割りには出土量が少なく、その時期を判断するのが難しい。第V層とSD501においては瓦器などの中世の遺物を含んでいたが、それは状況より上位層からの混入と考えられる。そして、混入とみられるものを除いた中で下限時期と考えられる遺物としては、SD501か

ら11世紀前半の土師器での字状口縁皿片（細片のため図化せず）1点の出土があった。ただし、当該期の遺物はこれを除いて明確なもののがなく、これも混入の可能性が残る。そして、少ないと中でも比較的まとまって認められたのが、71・72の須恵器杯のように平安時代初頭頃とみられるものである。そして、71・72の他に図化はできなかったが、面取りされた土師器高杯脚部や須恵器壺などの破片があった。また、時期が平安時代後期まで下る可能性のある須恵器壺（73）や、時期の特定は難しいが黒色土器A類壺片などの平安時代の遺物がみられた。このようなことから、第V面については時期をしづることは難しく、8世紀末～11世紀前半という大きな幅をもっておむね平安時代に相当するであろうとしかいえない。

それでは、以上のことと踏まえて検出遺構についてみると、まず、SD501東西溝については、先述したように第IV面段階でSD403として検出したものである。何ゆえ上位面で検出した遺構を下位面段階の遺構であると判断したかというと、まずSD501東西溝とSD403はほとんど同じ位置にのびており両者は一連のものであると考えられる。そして、SD403は第IV面の重複関係からみると少なくとも12世紀後半より以前のものである。さらに、SD403からは少量ながら平安時代初頭頃の須恵器片・土師器片が認められたが、それより新しい時期の遺物は認められなかったことがある。埋土については、SD403とSD501東西溝では異なっていたが、おそらくは、第V面段階でのSD501東西溝が埋没する段階で流水に運ばれた土砂がやや盛り上がるよう堆積したことによって、第IV面遺構検出時にSD501東西溝の上端面が認められ、それを第IV面の遺構として検出してしまったのだと考えられる。

次に、SD501の南北溝と東西溝の関係をみると、これらについては、埋土はほぼ同質であったが、先述したように南北溝と東西溝とでは性格が異なるようであり、これらが本来的に一体のものであったかどうかの判断は難しいところである。しかし、東西溝が南北溝にちょうど接する箇所において、南北溝の底面を抉るように東西溝からの流水によると思われるくぼみが認められた。この点を考慮すると、南北溝と東西溝は何らかの一連性をもって形成されたものとみられ、おそらく東西溝は南北溝への配水を意図したものではないかという可能性が考えられる。そして、SD501の平面形をみると、ちょうど調査区西側が南北溝と東西溝によって方形に区画されているようにみえる。

SD501の方位は、南北溝がN 10° Eであり、東西溝はおむねN 74° Wとなり、直角方向に交わるものではないが、南北溝の方位は、第I面と第III面でみたように、条里地割の方位と一致する。このことから、SD501南北溝は農耕にともない形成されたものである可能性が高く、東西溝は方位がやや傾くものの南北溝への配水を目的とし、接点のくぼみは取水口の痕跡ではないかと考えられる。

このように、SD501は農耕にともない形成されたものと考えられるのであるが、SD501の東側に認められた落ち込み501についても、ややカーブしながらSD501に沿うような状況で落ち込み肩がのび、落ち込み内の底面がそれほど凹凸がなくほぼ平坦であった。こ

のことから、これも耕作地の区画など農作業にともなうものではないかという可能性が考えられる。

また、畝状遺構としたSX501とSX502については、これが畝かどうかの断定は難しいが、この方位もおおむねN10°Eとなり、SD501南北溝の方位とも合致する。この点で、SD501が耕作地の区画を示すものであるとするなら、SX501とSX502が畝である可能性も高いと考えられる。

なお、ここで検出されたSD501等の遺構が、条里地割に基づいて形成されたものとすると、先に第V面の時期を平安時代初頭から後期にかけての幅広いものと想定したが、SD501等が平安時代初頭のものとなると、この地域の条里地割施行の初現段階を示すものともなる。しかし、今回の調査で得られた資料では、そこまで踏み込んで考えるだけの根拠に乏しく、慎重にならざるを得ない。この点で、第V面の時期については、平安時代初頭は含まず、9世紀後半以降のものと想定するのが妥当といえるかもしれない。

f-1. 第VI面の遺構

古墳時代後期を中心とする遺構面であり、溝や落ち込みなどが検出された。遺構面の標高は、おおむねT.P2.4~2.6mとなる。

[溝]

SD601は、調査区北西部で部分的に検出された南北方向にのびる溝である。幅は0.4~1.4m、深さは5~15cmを測り、方位はN10°Eを示していた。埋土は青灰色砂を主体としていた。

SD602は、長さ約10.2m、幅30~70cm、深さ6~16cmを測り、方位はN3°Wを示していた。埋土は茶色がかる暗灰色粘土を主体としていた。その底面レベルは、南端部が北端部より10cmほど低かった。

SD603は、SD602に重複する形で検出された。長さ約1.15m、幅約30cm、深さ約8cmを測った。方位はN50°Eを示し、埋土は暗灰色粘土であった。

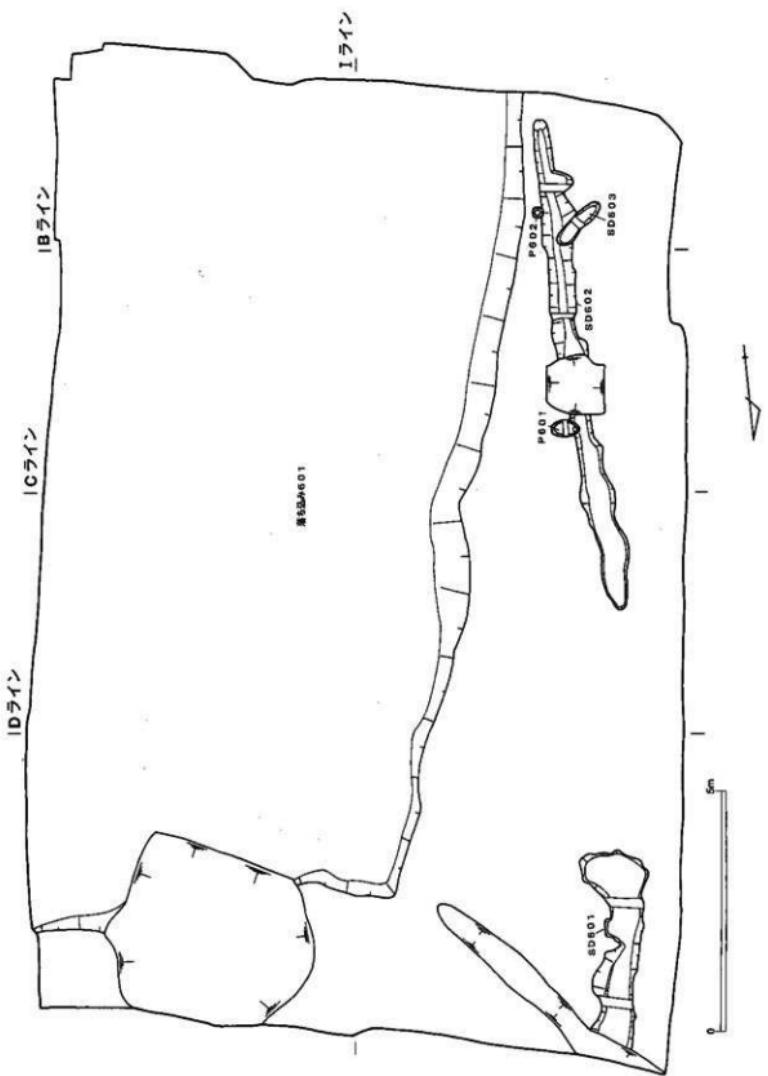
[落ち込み]

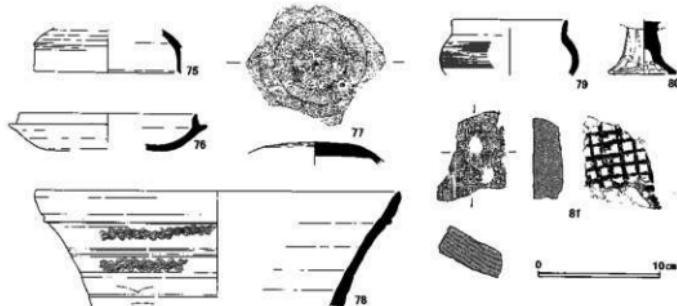
落ち込み601は、調査区の東側が落ち込む形で検出されたものである。その落ち込み肩のラインはくの字状に曲がり、その南北ラインはおおむねN15°E、東西ラインはほぼ磁北と直交する方位でのびていた。落ち込み肩の深さは3~15cmを測り、埋土は砂粒を多く含み黒色かる暗灰色粘質



写真16 TA区第VI面（北から）

第25図 TA区第V面平面図





第26図 TA区第VI層出土遺物実測図

土と黒色粘土が混じる茶色がかった暗灰色粘質土が堆積していた。落ち込み601については、くの字状に屈曲する落ち込み肩から自然地形のものではなく、人為的な掘削等によるものと考えられる。

f-2. 第VI層・第VI面の遺物

[第VI層出土遺物]

75~77は、須恵器蓋杯である。75は杯蓋である。天井部外面は回転ヘラケズリ、他を回転ナデで調整されている。稜はやや退化した感がある。

76は杯身である。残存部分において口縁部～底部外面は回転ナデ、底部内面はナデ調整によっている。復元口径が14.6cmと大きいが、器高が低いものである。

77は、図では杯蓋として表わしたが、天井部もしくは底部のみの残存であり、蓋か身かの判断はつかない。外面は回転ヘラケズリ、内面はナデ調整され、外面に2条の線刻がみられるが、線刻は浅く意図的になされたものなのはわからない。残存部分からして口径が大きいものとみられ、時期的には76と同じくらいではないかと考えられる。

78は、須恵器甕の口頸部である。外反して開く口頸部であるが、口縁端部付近で内済気味になり上方へのびる。口縁端部のやや下に凸帯が1条付され、さらに下方にゆるい凹線が2条めぐり、それらを紋様帶としてやや粗く波状紋が施されている。

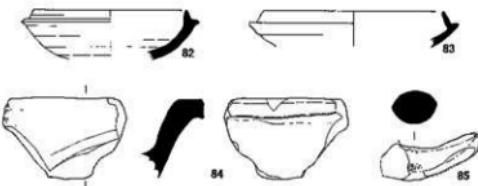
79は、須恵器短頸壺である。体部外面はカキメ、他を回転ナデにより調整されている。口頸部はやや外へ開き気味となり、肩部は張ることなく丸みをもつ。

80は、手づくねにより作りだされた粗製土器であるが、おそらくは高杯を模したものの脚部と考えられる。

81は、平瓦である。凹面はヘラ状のものでナデ消しされ、凸面には格子目タタキ痕がみられる。灰白色を呈し、硬質に焼き上がっている。白鳳～奈良時代前期のものとみられ、上位層か

らの混入である。

第VI層は、須恵器を多く含んでいたが、図化できたものはなかったものの、遺物量の割合としては土師器の方が多かった。



[第VI面遺構出土遺物]

82・84・85は、落ち込み601

1から出土した。82は須恵器杯

身である。底部外面中央付近は回転ヘラケズリがなされているようであるが、自然釉付着のため不明瞭である。他は回転ナデによっている。

84は縁の掛口部分である。掛口は内側へ折れ、その上端面および側端面がヘラ状のものでナデられ整えられている。また掛口の下方に底の付け根部分がみられる。外面はナデ調整されているが、外面の一部にハケメ状の痕跡がみられる。

85は把手である。質感が84の縁と似るが、縁の胎土に黒色砂粒を多く含むのに対して把手には含んでおらず、別のものと考えられる。表面にはハケメがみられる。84と85の時期については、同一遺構出土の82にみると、おおむね古墳時代後期の所産ではないかと考えられる。

83は、SD602から出土した須恵器杯身である。残存部分においては外面ともに回転ナデにより調整されている。

f-3. 第VI面のまとめ

第VI面では、溝や落ち込みなどが検出された。落ち込み601は、落ち込み肩ラインがくの字状に曲がることから人為的に形成されたものとみられる。落ち込み内は、東側が西側より10~15cmほど深くなるが、面的にはほぼ平坦であることから、耕作地等の区画を示すものかもしれない。また、落ち込み肩と溝の方位についてみると、方位は各々で異なり、これらの遺構が関連性をもって存在したのかどうかはわからない。

さて、第VI面の時期であるが、遺構内からの出土遺物は破片ばかりで図化できたものは少なかったが、おおむねは須恵器82・83にみると、6世紀後半に相当するのではないかと考えられる。図化できなかったが、SD601においても当該期のものとみられる須恵器壺片があり、他にSD603とP601においても須恵器片がみられた。ただし、次節で取り上げるが、下位層の第VII層において上位層からの混入とみられる7世紀前半前葉の須恵器提瓶の出土があり、これを考慮すると、第VI面の時期は6世紀後半でもその終わりから7世紀に入るという可能性が考えられる。

なお、SD601の方位はN10°Eを示すが、時期的に上位面でみられた条里地割とは関係がないものといえる。

g-1. 第VII面の遺構

古墳時代前期を中心とする遺構面と考えられ、土坑や溝、落ち込みなどが検出された。遺構面の標高は、おおむねT.P2.15~2.45mとなる。

〔土坑〕

調査区北西部で大型の土坑が多数検出された。その中で最大のSK704は、長径約3.6m、短径約2.3mを測ったが、深さは約7cmと浅かった。SK704には、長径約80cm、短径約60cm、深さ約8cmを測るSK705と、検出部で長さ約1.4m、深さ約11cmを測るSK706が重複していたが、遺構精査の段階で、SK705と重複する付近で土師器壺を主体とする土器片が密集して検出された（土器群701）。またSK704内においては、土師器高杯脚部片が検出された（土器群705）。

SK714は、長径約2.3m、短径約1.5m、深さ約10cmを測った。SK714内においては底面からやや浮いた状態ではあるが、土師器高杯片を中心に土師器壺片も混じて土器片が密集して検出された（土器群707）。

SK712は、調査区西壁にかかる形で検出された。検出部分で長さ約2.8m、深さ約8cmを測った。SK712の東側には、長径約1.4m、短径約1m、深さ約20cmを測るSK711や、径30~35cm、深さ約7cmを測るP709が重複していたが、遺構精査時においてこれら遺構の上面で東海系土師器壺1個体分の破片がまとまって検出された（土器群702）。さらに、その南側1mほど離れて同じく遺構面上で土師器壺片を中心に土師器高杯片を含む土器片がまとめて検出された（土器群704）。

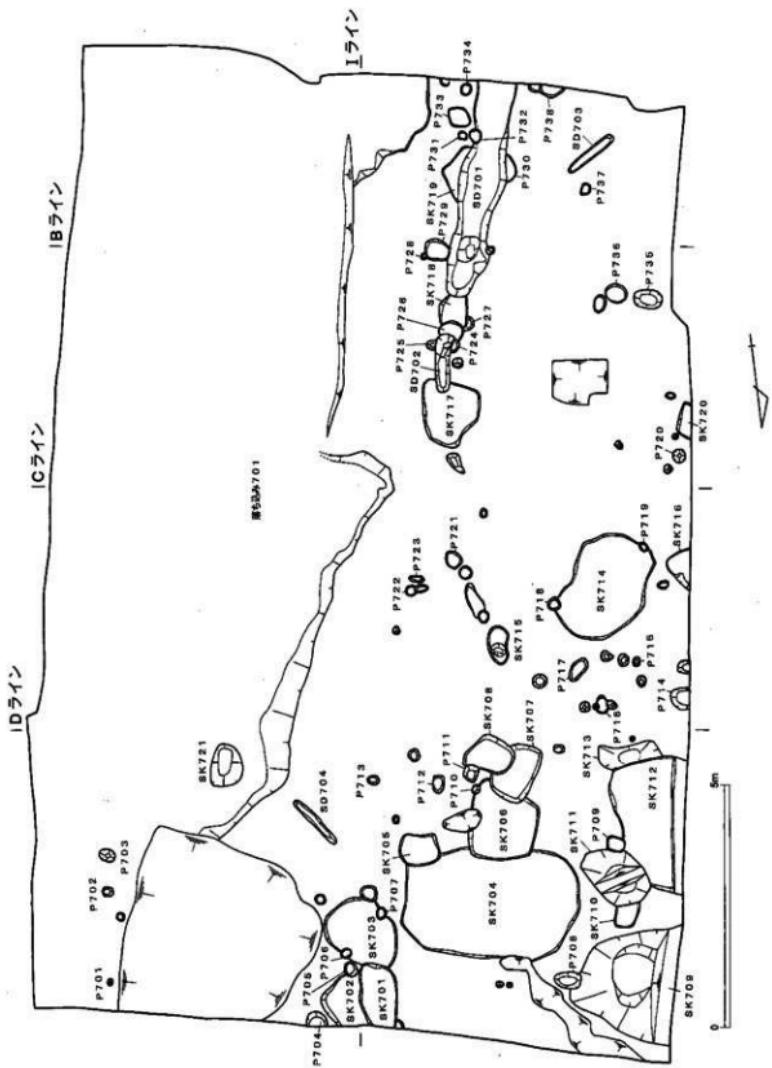
SK709は、検出部で長さ約2.1m、深さ約53cmを測り、他の大型土坑と比べると深い深度を測った。

この他、SK703は、長径約1.6m、短径約1.2m、深さ約11cmを測り、その底面からは少し浮いた状態ではあるが、土師器壺片を中心に土師器高杯片等を含む土器片が密集して検出された（土器群709）。

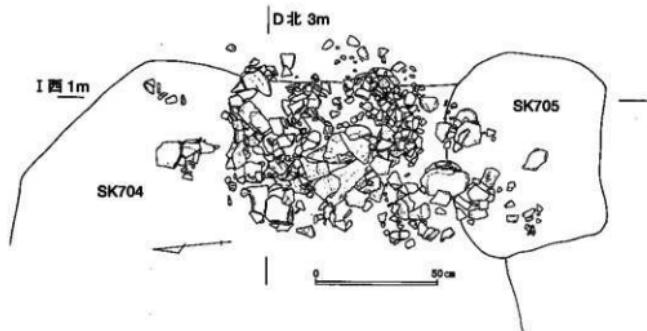
上記の土坑では、黒灰色もしくは淡黒灰色の砂質土～粘質土が埋土の主体として認めることができた。また、多くの土坑が10数cm以下の深度で、その深度は比較的浅かった。



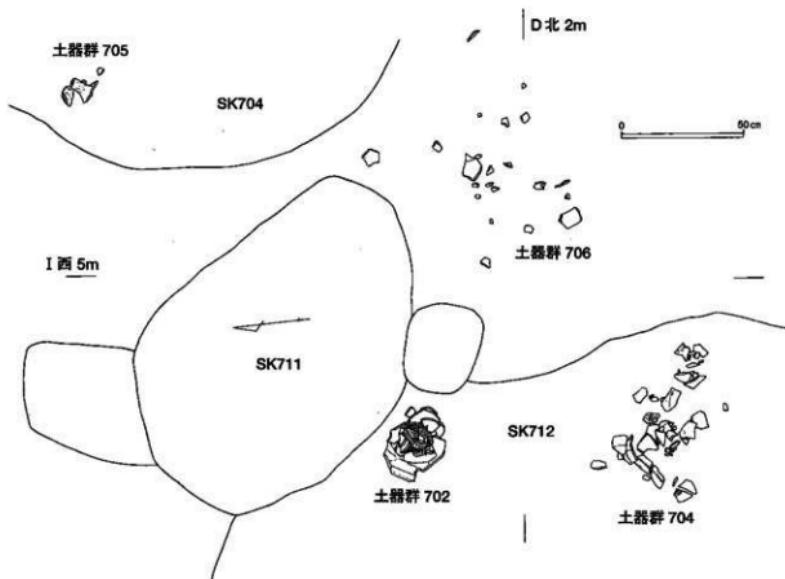
写真17 TA区第VII面（北から）



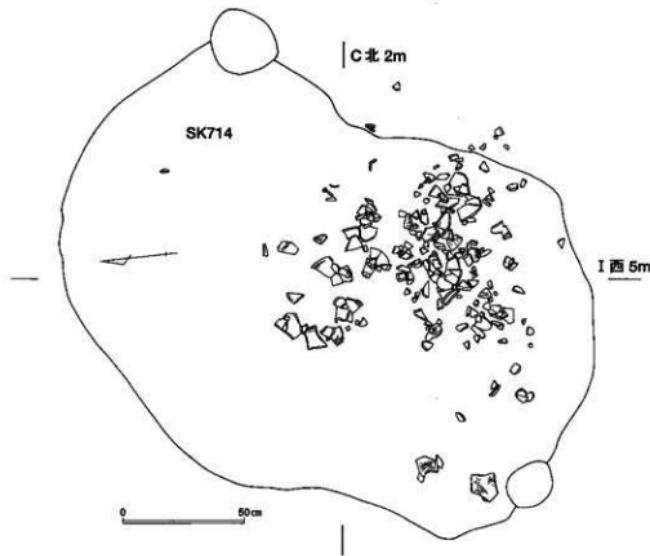
第28図 TA区第VII面平面図



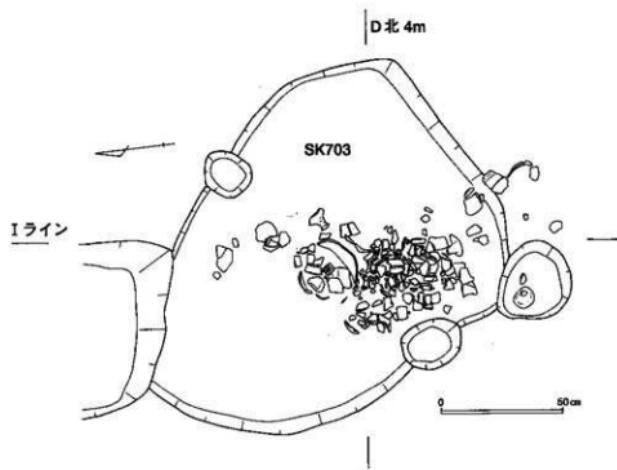
第29図 TA区第VII面土器群701



第30図 TA区第VII面土器群702・704・705・706



第31図 TA区第VII面土器群707



第32図 TA区第VII面土器群709

[溝]

SD 701は、検出部で長さ約4.5m、幅60~95cm、深さ約12cmを測り、N15°Eの方位をもって南北方向にのびていた。SD 701の北側には別の溝（SD 702）や土坑（SK 717・SK 718）、ピット（P 724~P 727）などが重複し、それらはSD 701の方位に沿う形で重なり合っていた。一見、これらの遺構をみると、一続きの関連をもつたもののようにみえる。そして、SD 701の埋土は青灰色がかる黒灰色粘質土であり、他の遺構埋土についても黒灰色粘質土を主体とし、それらの土質はたいへん似たものであった。また、各遺構の底面レベルについても極端な差はなかった。このことから、これらの遺構のいくつかについては、検出時に細かく土質を区分した結果、本来は一続きの溝としてとらえるべきものを、別遺構として認識して掘削してしまった可能性がある。

[落ち込み]

落ち込み701は、調査区の東半部が落ち込む形で認められた。その落ち込み肩は、曲がりながら途中で攪乱を受けつつ南北方向にのび、その東側が落ち込み肩で1~13cm落ち込み、最大で約37cmの深さを測った。その方位は、落ち込み検出部分の北端と南端を結ぶラインでみると、おおむねN21°Eの方位を示す。埋土は、茶色がかる黒灰色粘土・粘質土が主体となり、白色細砂と黒灰色細砂の混合層の堆積もみられた。後述するが、おそらくは自然地形による落ち込みと考えられる。

[ピット]

建物跡や杭列などとして復元できるピットの並びは確認できなかったが、調査区北東部で検出された2基のピットに木杭が残存していた。

P 701は、径約15cm、深さ約40cmを測り、径約6cm、長さ約34cmの木杭が残存していた。杭まわりには黒灰色粘土が埋土として認められた。

P 702は、径20~25cm、深さ約15cmを測り、径約2cm、長さ約13cmの木杭が残存していた。また木杭はピット底面より約6cm下まで打ち込まれていた。ピットの埋土は、上層に黒灰色粘土、下層に淡青灰色シルトが認められた。

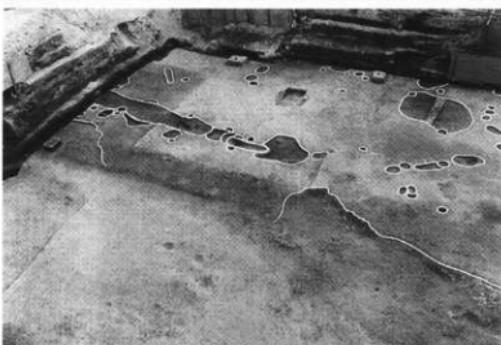
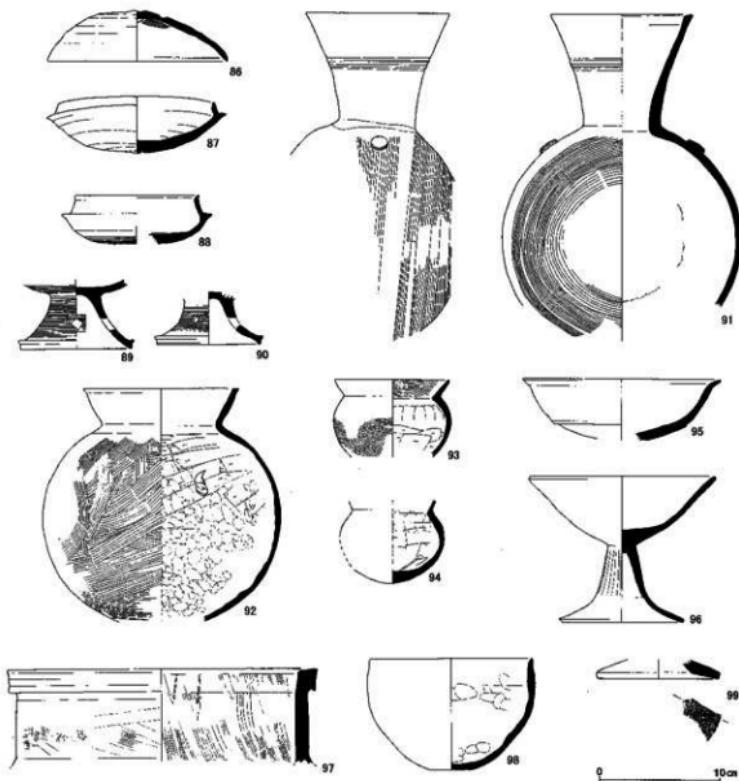


写真18 TA区第VII面南半（東から）



第33図 TA区第VII層出土遺物実測図

g-2. 第VII層・第VII面の遺物

[第VII層出土遺物]

86~87は、須恵器蓋杯である。86は杯蓋であり、大きく焼け歪んでいる。天井部中央付近は回転ヘラケズリされているようであるが、自然釉着のため不明瞭である。他は回転ナデによるが、天井部内面に同心円の當て具痕がついている。

87は杯身であり、これもやや歪んでいる。底部外面を広く回転ヘラケズリしているが、中央付近はヘラ切りの痕が残る。他は回転ナデ調整されている。

88~90は、須恵器高杯である。88は杯部である。底部外面は回転ヘラケズリ後にカキメが施

され、他は回転ナデ調整されている。口縁端部は凹線によりやや段状となる。

89と90は脚部である。ともに外面にカキメが施され、小さな方形の透かしを有するが、89のカキメはやや粗く、90は細かいものとなっている。また、透かしについては、89は残存状況から対で2方、90は3方穿たれている。接合部分が少なく断定できないが、88杯部と90脚部は同一個体の可能性がある。

91は、須恵器提瓶である。口頸部および体部の残存部分内面については回転ナデ、体部外面はカキメが施されている。また口頸部中程に凹線が3条めぐる。把手はボタン状のものとなっている。

92は、土師器壺である。体部外面はやや粗いハケ調整、体部内面下半を指オサエ、同上半をヘラケズリで調整されている。口縁部は横ナデ調整されており、口縁端部は上端がやや平坦気味で外側へ肥厚する。

93・94は、土師器小型丸底壺である。93は、体部外面および口縁部内面をハケ調整、体部内面下半をヘラケズリし、短い口縁がつくものである。94は、口縁部上半が欠損しているが、口縁部から体部外面上半は横ナデ、体部外面下半はナデ、体部内面上半は指オサエおよびナデ、体部内面下半は板ナデ調整されている。

95・96は、土師器高杯である。95は、杯部のみが残存する。杯部外面下半に稜がめぐり、そこからやや内湾気味に口縁が立ち上がるが、口縁端部は横ナデにより外側へ屈曲する。調整は、底部内面は摩滅のため不明であるが、外面稜より下部は指オサエおよびナデ、稜より上部の口縁部は横ナデ調整されている。

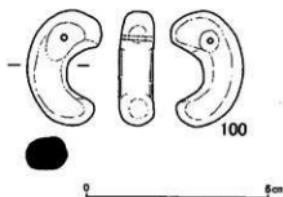
96は、明瞭な屈曲部をもたない杯部を有する高杯である。杯部はナデおよび横ナデされ、脚部は柱状部外面が縱方向に幅広のヘラミガキがなされ、他はナデ調整によっている。

97は、土師器壺の口縁部とみられるものである。口縁端部はその外縁に粘土帯を付加して断面四角形に肥厚させている。口縁端部の調整は横ナデ、他はナデ調整されているが、内外面にハケメが残る。この破片はちょうど接合面から剥離しており、剥離部分の内外面がそれぞれ内側と外側に開くような様相をもっており、これが直接体部に繋がっていたとは考えにくく、おそらく二重口縁の上位部分にあたるものと考えられる。

98は、土師器鉢である。内湾気味の体部をもつが、口縁端部がやや外反する。外面下半は摩滅のため調整不明であるが、外面下半はナデ、内面は指オサエおよびナデ調整され、やや粗い作りとなっている。

99は、土師器高杯の脚部とみられる破片である。外面はナデ調整、内面は屈曲部の上位がナデもしくはヘラケズリされ、下位部には布目痕が認められる。

100は、石製の勾玉である。直径1.5mmほどの孔があけられ、片面（図左）は孔の周りが平坦



第34図 TA区第VII層出土勾玉実測図

に整えられ、もう片面（図右）は孔を中心に5mmくらいの範囲で孔にむかってごく浅く窪んでいる。

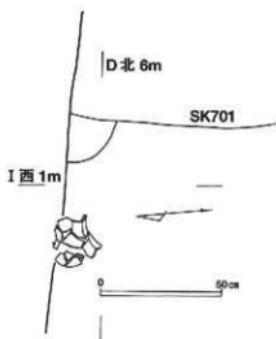
[第VII面土器群出土遺物]

第VII面では、土器片が密集もしくは少量ながらもまとまりとして検出された箇所が9か所あった。造構の項で位置を記さなかったものとして土器群703・土器群706・土器群708があるが、土器群703はSK701のすぐ西側で、土器群706はSK712のすぐ東側で検出された。また、土器群708については調査区南西部で確認されたが、その位置を記録する前に取り上げてしまった。

101～103は、土器群701のものである。101・102は山陰系の土師器で、101は緩やかな屈曲をもつ二重口縁の壺である。口縁部は横ナデ、体部外面はハケ調整、体部内面は指オサエおよびナデ調整されている。

102は、土師器二重口縁壺である。これも口縁部の屈曲はにぶいものとなっている。口縁端部は内側へ張り出すように曲げられ、上端は平坦面となっている。口縁部は横ナデ、体部外面はハケ調整、体部内面は下半をヘラケズリ、上半を指オサエおよびナデにより調整されている。

103は、土師器鉢である。体部外面から口縁部の一部については指オサエおよびナデ調整によるが、作りはやや粗いものとなっている。口縁部は横ナデ、体部内面はナデ調整、底部の器壁は厚く、ナデにより平らに整えられている。一見平底であることから韓式系土器のようにもみえるが、作りが粗く韓式系のものとは



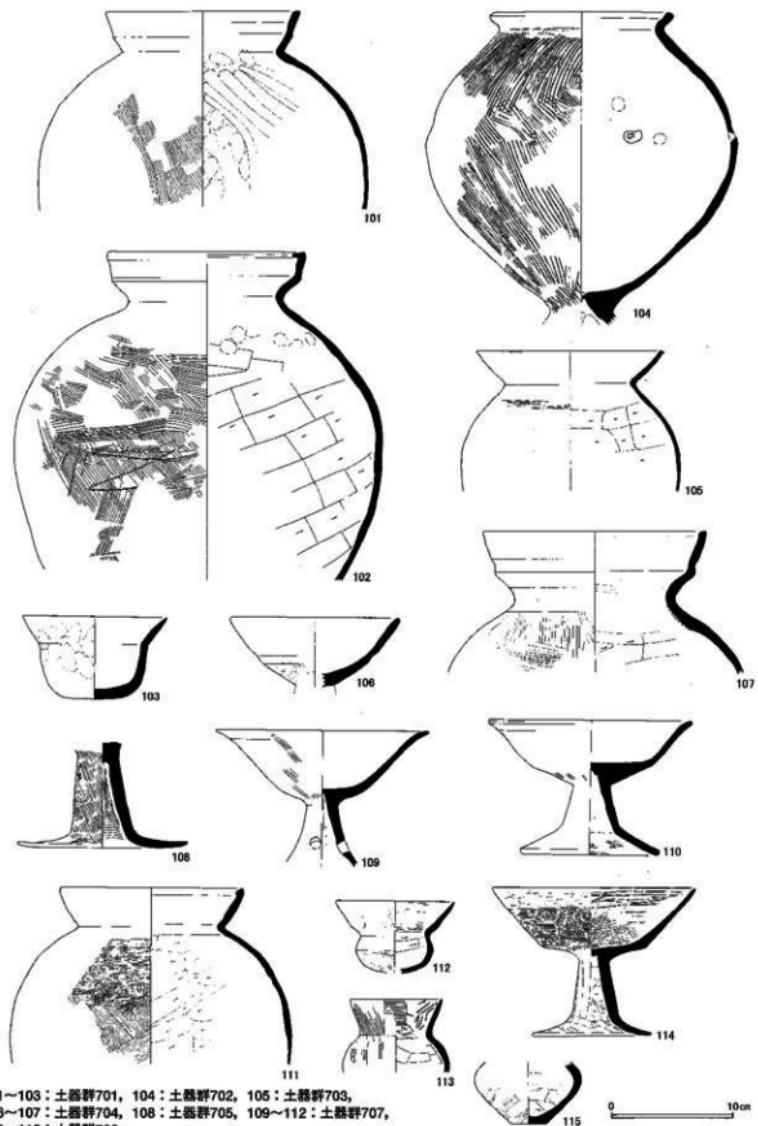
第35図 TA区第VII面土器群703



写真19 TA区第VII面土器群701（西から）



写真20 TA区第VII面土器群702



101~103: 土器群701, 104: 土器群702, 105: 土器群703,
106~107: 土器群704, 108: 土器群705, 109~112: 土器群707,
113~115: 土器群709

第36図 TA区第VII面土器群遺物実測図

異質さを感じさせる。

104は、土器群702として検出した東海系土師器壺である。いわゆるS字状台付壺であるが、口縁部はごくわずかに屈曲する程度である。外面のハケ調整は粗く、器壁は厚いものとなっている。また、残存部において体部中央に5mm程度の孔が焼成後に内面から1か所穿たれている。

105は、土器群703として検出した土師器壺である。体部外面はハケメが認められるが、摩滅のため全体的な調整は不明瞭である。体部内面はヘラケズリ、口縁部は横ナデされ、口縁端部は端面をもつ。

106・107は、土器群704のものである。106は土師器高杯の杯部である。外面に粗雑で鈍い稜をもち、稜より下は指オサエおよびナデ調整されている。口縁部は横ナデされ、底部内面はナデ調整されている。107は山陰系の土師器二重口縁壺である。口縁部の屈曲は緩やかであり、口縁部は横ナデされているが、内面に一部粗いハケメが残る。体部外面はハケ調整、体部内面はヘラケズリおよび板ナデされている。

108は、土器群705として検出した土師器高杯脚部であり、またSK704内出土のものでもある。柱状部から強く屈曲して裾部が広がる。内外面ともハケ調整されているが、裾部内面はハケ調整後ナデ、裾端部は横ナデされている。また柱状部内面上半には絞り痕が残る。

109～112は、土器群707のものであり、またSK714内からの出土遺物でもある。109・110は土師器高杯である。109は、杯部が明瞭な屈曲部をもたず外反して広がるものである。外面はハケ調整後にナデされているがハケメが残る。脚柱状部内面はヘラケズリされている。

110は、杯部が緩やかな屈曲をみせて外反して広がり、口縁端部は強く横ナデされている。杯部外面および脚裾部内面にハケメが残る。脚柱状部内面はヘラケズリされている。

111は、土師器壺である。体部外面のハケ調整はやや粗く、体部内面はヘラケズリされている。口縁端部は内側に肥厚する。

112は、土師器小型丸底壺である。体部外面はハケ調整、体部内面はヘラケズリ、口縁部は横ナデによるが、口縁部外面にはハケメが残る。

113～115は、土器群709のものであり、またSK703内出土のものでもある。113は、土師器小型丸底壺である。口縁部から体部外面にかけてはハケ調整されているが、一部はハケ調整後にナデされている。また口縁端部は横ナデされ、体部内

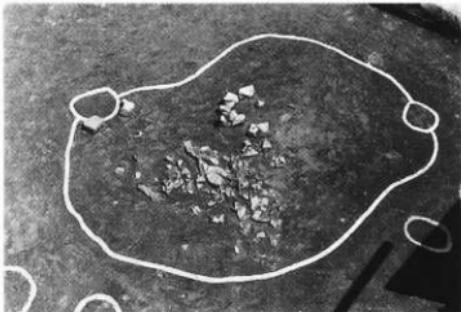
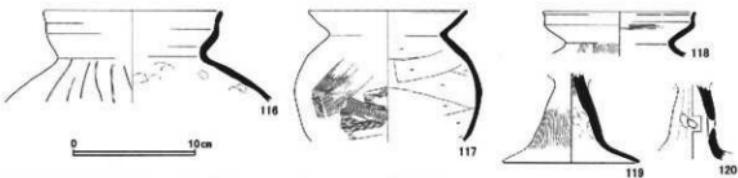


写真21 TA区第VII面土器群707（南から）



116: SK704, 117: SK714, 118: SK707, 119: SK718, 120: 落ち込み701

第37図 TA区第VII面遺構出土遺物実測図

面については板ナデされている。口縁内面に意図的なものかどうかはわからないが、細い線刻がみられる。

114は、土師器高杯である。屈曲部から直線的に開く杯部をもち、杯部外面はハケ調整、杯部内面はヘラナデされているが、一部にハケメが残る。脚柱状部外面はヘラナデされ、裾部外面はナデ、脚部外面はヘラケズリされている。

115は、弥生土器の小型壺と考えられる破片である。内面は板ナデ・ナデ、外面は底部までハケ調整されている。

ここでは図化できなかったが、土器群706では、やや厚手の体部外面ハケ調整、体部内面ヘラケズリの土師器壺片がみられ、土器群708では、同様の厚手の土師器壺片や、外面ハケ調整、内面ナデによる土師器高杯脚部片があった。また、土器群707には、古墳時代後期のものと考えられる須恵器壺片が1点含まれていたが、これは上位層から混入したものと考えられる。

[第VII面遺構出土遺物]

116は、SK704出土の山陰系の土師器二重口縁壺である。口縁部の屈曲は緩やかであるが、口縁端部にかけてやや外反する。体部外面は板ナデ、体部内面は指オサエおよびナデ調整されている。体部外面には残存部において6条の線刻が縦方向に施されている。

117は、SK714出土の土師器壺である。体部外面のハケ調整は肩部のあたりでナデ消され、体部内面は上半がヘラケズリされている。口縁端部は丸みをもってやや小さく肥厚し、器壁はやや厚いものとなっている。なお、土器群707として取り上げた遺物（109～112）について



写真22 TA区第VII面土器群709（東から）

も、SK714内出土遺物としてとらえ得る。

118は、SK707出土の土師器受口状壺である。口縁部は強く横ナデされており、口縁端部内面にゆるく凹線がある。体部外面にはハケメが認められる。口縁部内面の一部にもハケメが残る。吉備系のものである。

119は、SK718出土の土師器高杯の脚部である。外面は柱状部をハケ調整、裾部をナデ調整され、内面については柱状部上半に絞り痕が残るが、下半から裾部にかけて指オサエおよびナデ調整されている。

120は、落ち込み701出土の土師器高杯の脚部である。二次的焼成を受けたようであり、上端部を中心赤化している。また焼成後柱状部に表面から1か所孔が穿たれている。摩滅が進んでおり調整は不鮮明であるが、柱状部外面はヘラ状のもので整えられ、内面についてはナデ調整されている。

この他、次下面の第VII面でSD701を中心とする一連遺構の掘り残し部分から、内面を赤塗りした土師器細片が1点出土している。

g-3. 第VII面のまとめ

第VII面では、古墳時代の遺物を伴い土坑、溝、落ち込みなどが検出された。遺物包含層である第VII層の遺物には、7世紀代の須恵器提瓶をはじめ、古墳時代中期～後期の須恵器を含みつつ、布留式新相段階を中心とする土師器が多くあった。

また、遺構面においては、土器片がまとまって認められた箇所が9か所あった。その土器群として検出された遺物をみると、おおむね布留式新相段階を中心とするものであった。そして、遺構出土遺物をみても、時期的な特徴をとらえ得る下限遺物としては、布留式新相段階に相当するとみられるものがほとんどであり、土坑ではSK701・703・704・706・707・712・714・715・717・718、溝ではSD701・702・703、ピットではP707・720・732・734などで、当該期の遺物が認められた。

なお、土坑SK703・708・709、溝SD702、ピットP722・734・737においては、初期須恵器を含む須恵器の小片が1点もしくは2点認められたが、状況からして上位層からの混入であろうと考えられる。

このように、第VII面の時期は、おおむね布留式新相段階の古墳時代前期後葉に相当すると考えられる。ただし、落ち込み701については、古墳時代前期の遺物とともに古墳時代後期の須恵器を比較的多く含み、第VII層とほぼ同様の内容をもっていた。このことから、落ち込み701は、人為的な掘削によるものではなく、自然の地形的な落ち込みであり、それは本来的には第VII層と一体ととらえるべき土層の堆積であったものと考えられる。

さて、落ち込み701を除いてはおおむね古墳時代前期後葉のものと考えられる第VII面の遺構であるが、ここでは、P701とP702で木杭が認められた他には、建物跡や杭列等に復元できるピットの並びは確認できなかった。また土坑や溝の性格や関連性についてもよくわか

らない。その中で特徴的なことを上げると、SK714内にて土器群707として検出した遺物には、他の器種を含みつつも土師器高杯が主体となり、少なくとも6個体以上あった。これをどのように解釈するかは難しいが、土器群707の形成過程においては、高杯という器種を意図的に集めるという行為があったといえ、高杯が供獻等に用いられることが多いと考えると、ここで祭祀的行為が行われたという可能性が推測される。

なお、出土遺物には、101・102・107・116のように山陰系の土師器が多く出土し、104の東海系や、前者よりやや時期的に古相のものであるが118の吉備系の土師器など、搬入土器が認められた。

h-1. 第VII面の遺構

古墳時代前期を中心とする遺構面である。遺構が検出されたのは調査区西半部のみで、溝やピットなどが検出された。遺構面の標高は、おおむねT. P2.1~2.4mとなる。

[溝]

SD801・SD802・SD803については、次下面の第IX面で検出されたSD901とほぼ同じ位置に重なる状況で検出された。このことから、これらの溝はSD901が埋没して、その一部が窪むなどしたところに土砂が堆積し、第VII面において3条の溝として検出されたものと考えられる。

SD801は、検出部で長さ約4.4m、幅1.05~0.8m、深さ約19cmを測り、SD802は、長さ約4.4m、幅1.1~0.8m、深さ約22cmを測った。SD803は、長さ約7.2m、幅1.5m以上、深さは検出部で24cmを測った。SD801とSD802では淡黒灰色粘質土と淡青灰色砂の混合層に黄色粗砂が混じる土が埋土として認められ、SD803ではより淡い淡黒灰色砂質土が認められた。

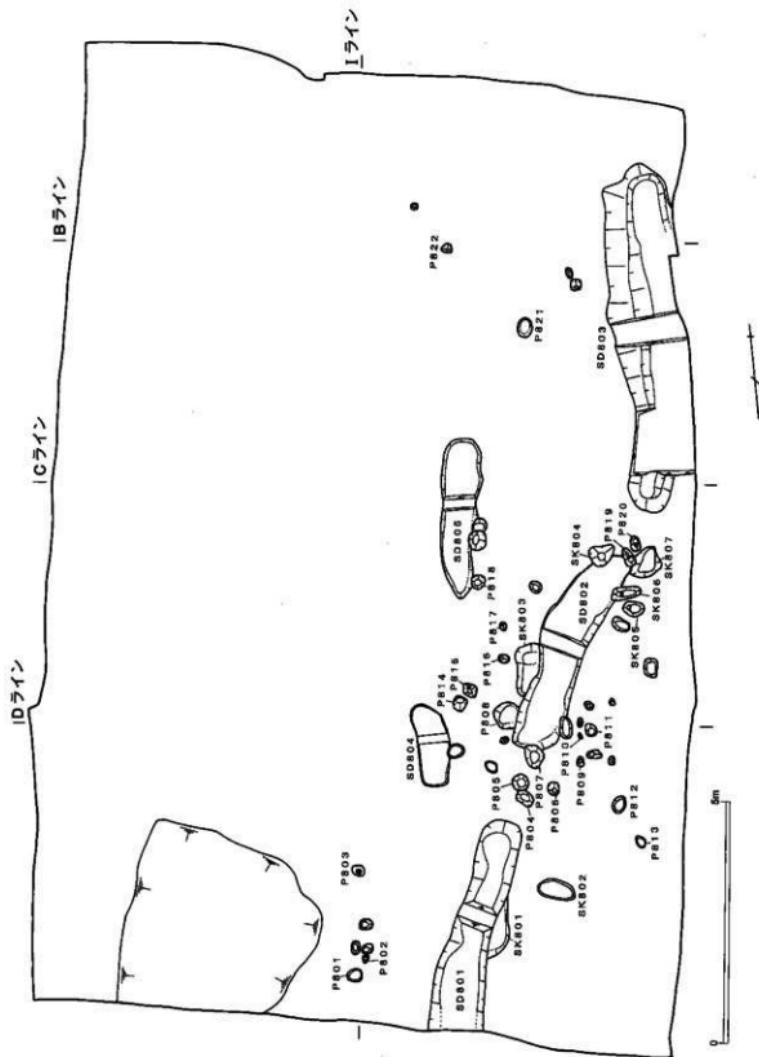
この他の溝では、SD804は、長さ約1.65m、幅65cm、深さ約5cmを測り、方位はおおむねN2°Eを示していた。またSD805は、長さ約3.3m、幅65~85cm、深さ約10cmを測り、方位はおおむねN7°Eであった。

なお、第VII面では、上位第VIII面で検出したSD701を中心とした一連の遺構の下層部分が残存して観察され、第VIII面の写真記録時に波線



写真23 TA区第VII面（北から）

第36図 TA区第Ⅲ面平面図



でその部分を示した。

[ピット]

ここでは建物跡等に復元できるピットの並びは確認されず、明確な柱穴等も認められなかった。その中で、重複するP 804とP 805において、土師器甕や鉢等の土器片がまとまって検出された。



写真24 TA区第VII面P804・805内土器出土状況

h-2. 第VII層・第VII面の遺物

[第VII層出土遺物]

121は、須恵器平瓶の口頸部と考えられるものである。口縁部は内湾気味に立ち上がる。自然釉のため不明瞭であるが、回転ナデされているようである。上位層からの混入と思われる。

122~124は、土師器浅鉢である。122と123は、SD 802とSD 803の中間付近の造構面上において重なって検出された。

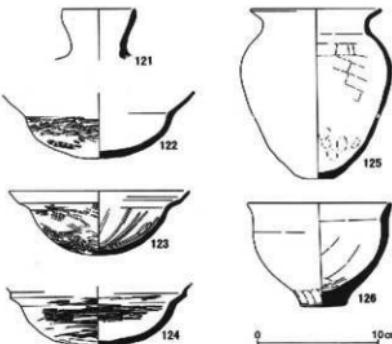
122は、口縁端部は欠損しているが、段を有さないものである。体部外面はハケ調整後にミガキが施されておりハケメが残る。内面はナデ調整されている。

123は、有段のものである。体部外面はハケ調整され、内面は放射状にミガキが施されている。

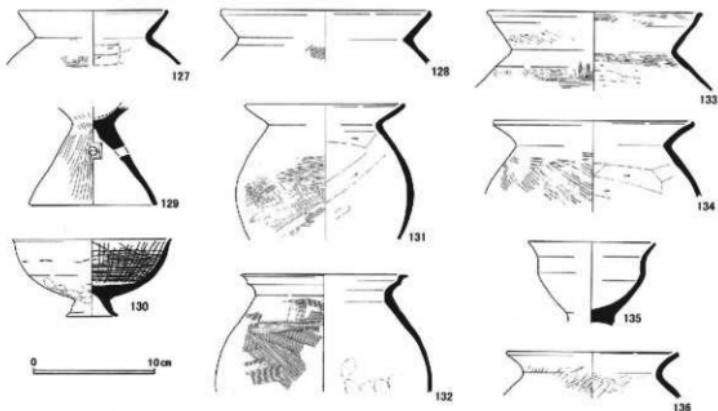
124も有段浅鉢であるが、口縁端部は欠損している。内外面ともミガキが施されている。

125は、弥生土器甕である。同一個体と考えられるものが上半部と下半部で分かれるが、接合部がなく図面上で復元した。口縁部は外側へ曲げられ横ナデされている。体部内面は上部にヘラケズリ、下部に指オサエが認められるが、摩滅のため明確でない。また体部外面の調整は摩滅のため不明である。底部は平底であるが、やや丸みをもつ感がある。

126は、弥生土器鉢である。SD 804のすぐ東側の造構面直上で検出された。丸い体部にやや外反する短い口縁部をもつ。口縁部は横ナデ、体部外



第39図 TA区第VII層出土遺物実測図



127～129 : SD801, 130～134 : SD803, 135 : P805, 136 : P807

第40図 TA区第VII面出土遺物実測図

面は指オサエ後ナデ、体部内面は板ナデされている。

第VII層内からは、この他に馬の白歯片が1点出土している。

[第VII面遺構出土遺物]

127～129は、S D 8 0 1 出土のものである。127は、土師器壺である。口縁端部が内側に丸くやや肥厚する。体部外面はハケ調整され、残存部において刺突文のような窪みが1か所ある。体部内面はヘラケズリされている。128は、庄内式土師器壺である。口縁端部がつまみ上げられ上方にのびる。残存部分において体部外面はタタキ後ハケ調整、内面はヘラケズリ後ナデられている。129は、土師器器台の脚部である。外面はヘラミガキ、内面は板ナデされている。

130～134は、S D 8 0 3 出土のものである。130は、土師器台付鉢である。低い台が付き、体部外面は指オサエ後ナデ調整され、内面は横方向のヘラミガキの後に放射状のヘラミガキが施されている。

131～134は土師器壺である。131は、口縁端部がわずかに丸く肥厚し、



写真25 TA区第VII面土師器浅鉢（122・123）

体部外面のハケ調整はやや粗い。体部内面はヘラケズリおよびナデ調整されている。

132は、近江系の受口状口縁甕である。口縁端部が外側へつまみ出され上端部は平坦となる。体部外面はハケ調整、体部内面は指オサエおよびナデ調整されている。

133は、口縁端部が外側へ肥厚する。体部外面はハケ調整され、残存部において刺突文が2か所認められる。体部内面はハケ調整およびヘラケズリされ、口縁部は横ナデされているが、内面は横ナデ前にハケ調整されている。また、口縁部外面にはヘラ状のものが斜めにあたった痕跡がある。これは口縁部と体部の接地部分に斜め方向のハケメがわずかに残ることから、ハケ調整具の痕跡だと考えられる。

134は、口縁端部が横ナデによりつまみ上げられ端面をもつ。体部外面はタタキ後に一部ハケ調整、内面はヘラケズリされている。おそらく大和型庄内式甕であろうと考えられる。

135は、P 805出土の弥生土器鉢である。台状の底部を有し、口縁部は外側へ開く。口縁部から体部上半は横ナデ、他はナデ調整されている。

136は、P 807出土の弥生土器甕である。外面のタタキは口縁部にまで達し、口縁部についてはタタキ後横ナデ調整されている。残存部において体部内面は板ナデされている。

h-3. 第VII面のまとめ

第VII面では、溝やビットなどが検出された。溝SD801～SD803については、先述したように第IX面検出のSD901が埋没した部分に土砂が堆積したものと考えられる。ビットについては、建物跡などの並びに復元できるものは確認されなかった。

さて、第VII面の時期であるが、第V層および遺構出土の遺物をみると、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものであった。古墳時代の遺物では、庄内式甕を含みつつ、布留式期の遺物を中心に認めることができた。そして、遺物が出土したほとんどの遺構からは下限時期のものとして布留式甕片が認められた。それら布留式期の遺物は、122～124・130の鉢のような布留式古相段階のものと考えられるものが比較的多く認められ、一方、やや粗いハケメの甕(131)や口縁端部が大きく肥厚する甕(133)など布留式新相段階に属するものも認められた。このことから、第VII面の時期は、下限時期としておおむね布留式新相段階の古墳時代前期後葉に相当すると考えられるが、そこにはやや古相のものもあり、おそらく上位遺構面の第V面より若干時期が遡る頃のものだと考えられる。

i-1. 第IX面の遺構

TA区の最終調査面である。自然流路とみられる溝やビットなどが検出された。遺構面の標高は、おおむねT. P1.8～2.2mとなる。

〔溝・自然流路〕

SD901は、先述のSD801・SD802・SD803のちょうど下位で認められ、南

北方向にやや蛇行してのびていた。幅0.9~1.6m、深さ20~49cmを測り、検出部分でその北端と南端を結ぶラインの方位はおおむねN17°Eを示していた。また、その南側で幅40~80cmの溝が東側へ分岐するのが認められた。底面レベルをみると、その北端と南端では、南端の方が北端より10cmほど低くなるが、その中間付近では部分的に10~20cmほど深くなるところもあった。埋土は灰褐色系・青灰色系の砂・砂礫を主体とし、自然流路であると考えられる。

この他、SD902~SD907についても形状や埋土などから自然流路の一部であるとみられる。SD902は、SD901の西側で検出され、くの字状にカーブして南北方向にのびていた。幅は0.8~1.2m、深さ35~45cmを測り、埋土は淡灰褐色粗砂を主体としていた。

SD903とSD904は、平面的には土坑ともいえる形状をもつが、その埋土はSD903で橙灰色粗砂、SD904で淡灰色砂となり、ともに流水にともない堆積したものと考えられる。SD903は、長さ約1.3m、幅55~75cm、深さ約10cmを測り、SD904は、長さ約2.65m、最大幅約1.25m、深さ約30cmを測った。

SD905も平面形は土坑のようにみえるが、長さ約7.15m、最大幅約2.2m、深さ30~45cmを測り、埋土は灰色砂を主体としていた。

東西方向にのびるSD906と南北方向にのびるSD907は、SD906がSD907に切られる形で検出された。SD906は、検出部で長さ約2.15m、最大幅約85cm、深さ約18cmを測り、埋土は灰褐色粗砂であった。SD907は、長さ約4.25m、最大幅約1.3m、深さ約12cmを測り、埋土は黄灰色砂であった。

さて、SD908とSD909についてであるが、その埋土はSD908が黄灰色砂、SD909が灰褐色砂であり、おそらく流水にともない堆積したものと考えられるが、その形状をみると、上記の自然流路とは異なり平面形が比較的整っていた。このことから、この2条の溝については他の要因で形成された可能性が考えられる。SD908は、長さ約1.9m、幅約35cm、深さ約5cmを測り、方位はおおむねN20°Eであった。SD909は、検出部分で長さ約3.2m、幅約25cm、深さ約5cmを測り、ややカーブしつつおおむねN3°Eの方位でのびていた。

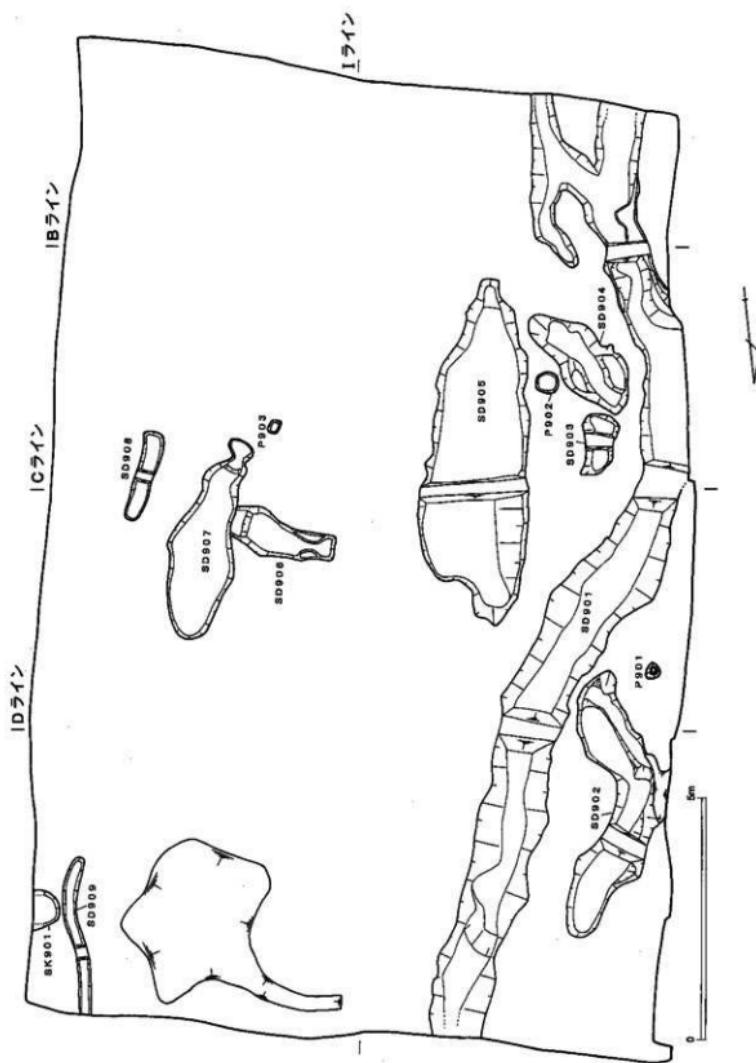
[ピット・土坑]

3基のピットを検出したが、P901において柱痕が認められた。P901は、掘り方の径28~33cm、柱痕の径約15cm、深さ約22cmを測り、淡黒灰色粘質土が埋土であった。他のピットについては、P902は径約55cm、深さ約8cm、



写真26 TA区第Ⅸ面（北から）

第41図 TAK地区平面図



埋土は橙灰色粗砂、P 9 0 3
は径 23×28 cm、深さ約5cm、
埋土は黒灰色粘質土であった。

土坑は1基検出した。SK
9 0 1は、調査区北東隅で部分的に認められたものであるが、検出部分で径約85cm、深さ約40cmを測り、埋土は黒灰色粘土であった。土坑内からは、径3~5cm程度の樹皮を残す木片がまとまって検出され、一部は杭状に加工されたものもあった。



写真27 TA区第IX面（南から）

I-2. 第IX層・第IX面の遺物

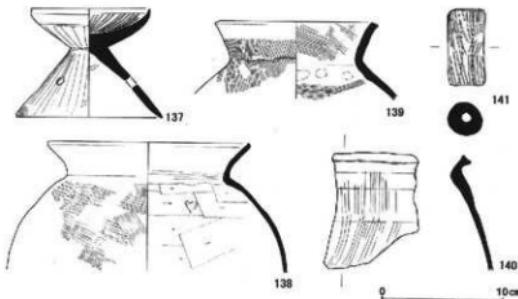
[第IX層出土遺物]

137は、土師器器台である。受部外面はヘラナデ、受部内面は放射状にヘラミガキが施され、口縁端部は横ナデにより上方へのびる。脚部についてはハケ調整後に外面はヘラナデ、内面はナデ調整され、ハケメが残る。

138は、庄内式土師器壺である。口縁部は横ナデされて端部はやや弱く上方へのびる。口縁部内面にはハケメが残る。体部外面はタタキ、内面はヘラケズリされているが、内面に小さな粘土塊が張りつき、ちょうどその外側部分にも粘土塊が押圧されたような痕跡があり、おそらく整形後に欠損した部分を補修したものではないかと考えられる。胎土から生駒西麓産のものとみられるが、タタキは右下がりのものであり、典型的な河内型庄内式壺ではない。

139は、弥生土器壺である。内外面ともハケ調整され、口縁部はハケ調整後に横ナデされている。口縁端部は横ナデにより端面をもつ。

140は、弥生土器壺である。くの字状に短く折れる



第42図 TA区第IX層出土遺物実測図

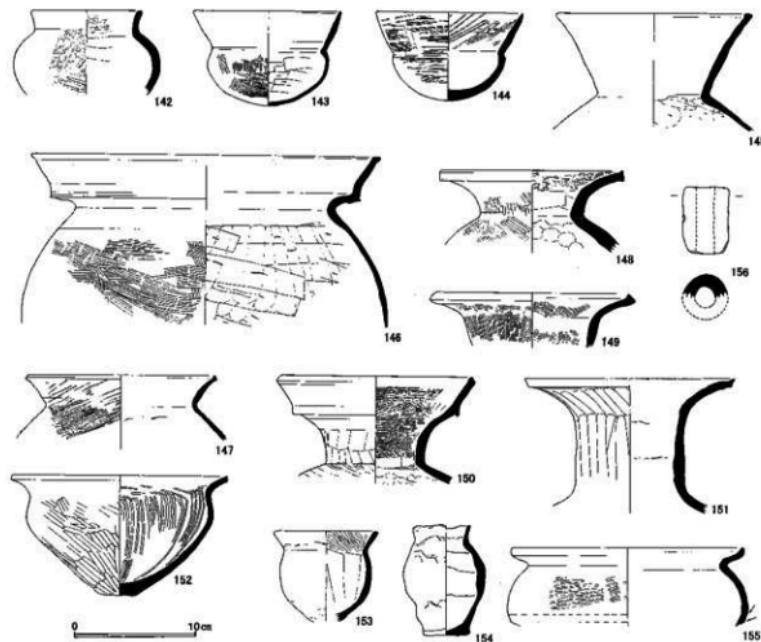
口縁部をもち、その端部は下方へ拡張する。体部外面はハケ調整後にナデ、内面はナデ調整されている。弥生時代中期のものである。

141は、土錐である。木板の上で転がして成形したものと思われ、表面に木目とみられる押圧痕がつく。中央付近の径がわずかに小さくなる。

[第IX面 S D 9 0 1 出土遺物]

142は、土師器短頸壺である。短くやや外反気味の口縁をもつ。口縁部は横ナデされるが内面にはハケメが残る。体部外面はハケ調整されるが、その下部はヘラミガキが施されている。また体部内面はナデ調整されている。

143・144は、土師器小型丸底壺である。両者とも大きく開く口縁をもつ。143は、体部外面はハケ調整、体部内面はヘラケズリされ、器壁は薄い。口縁部は横ナデされているが、内面に一部ハケメが残る。144は、口縁部および体部外面はヘラケズリの後ヘラミガキが施され、口縁部は縦方向のヘラケズリの痕跡が残る。口縁部内面は横方向のミガキの後に斜め方向のミガ



第43図 TA区第IX面SD901出土遺物実測図

キが施されている。体部内面はナデ調整されている。

145は、土師器直口壺である。残存部において体部外面は板ナデ、体部内面はヘラケズリ、口縁部は横ナデされ、口縁端部は内側に肥厚して、その上端部は平坦面をなす。

146は、山陰系の土師器二重口縁壺である。口縁部の屈曲は強く、外反して開く。稜線は鋭い。口縁端部はやや外側へのびる。体部外面はハケ調整、体部内面はナデ上げられたような痕跡の後にヘラケズリされている。

147は、弥生土器壺である。外面はタキ調整が口縁部まで行われ、口縁部は後に横ナデされている。口縁端部は強く横ナデされて上方へのびる。体部内面は板ナデされている。

148～151は、弥生土器壺である。148は、広口壺である。短い頸部から外側へ開く口縁をもつ。頸部から体部の外面および口縁部内面はヘラミガキが施されている。体部内面については残存部において指オサエおよびナデ調整で、やや粗いままで調整が終わっている。

149は、東四国系とみられる壺の口頸部である。頸部から口縁が外側へ大きく聞く。口縁端部は横ナデされ、上方に肥厚する。他は内外面ともハケ調整後にナデ調整され、頸部から口縁部の屈曲部付近の外面には指オサエの痕跡が認められる。

150は、二重口縁壺である。口縁部は緩やかに屈曲し、屈曲部に粘土紐が貼り付けられ稜が作られている。口縁部外面は横ナデされ、頸部外面はヘラナデ、口頸部内面および体部外面はヘラミガキされている。

151は、東四国系とみられる長頸広口壺である。口頸部外面はやや幅広のヘラミガキが施されている。内面はナデ調整、口縁端部は横ナデされているようであるが、摩滅のため不明瞭である。胎土には砂粒を多く含む。

152は、弥生土器鉢である。口縁部は横ナデされ、外側へ折れる。他は内外面ともヘラミガキが施されているが、外面に一部ハケメが残る。胎土には砂粒を多く含む。

153は、弥生土器小型壺である。口縁部内面はハケ調整、体部内面は板ナデ、外面は全体にナデ調整される。やや粗い作りとなっている。

154は、粗製ミニチュア土器の壺である。指オサエおよびナデ調整により成形されている。

155は、弥生土器鉢である。口縁部がくの字状に短く折れ、口縁端部は上方へのびる。体部外面はタキ、内面はナデ調整されている。破片の下端部はちょうど下部構造との接合面で割れており、外表面にも約7mmの幅で接合痕があり、おそらく下部構造との接合部に粘土突帯が貼り付いていたものと考えられる。その形状から手焙形土器の鉢部である可能性も考えられる。



写真28 TA区第IX面SD901内土師器小型丸底壺（144）

156は、土錐である。ほぼ半分に割れており、胎土中には1mm程度の砂粒を多く含む。上記で弥生土器としたもののうち、147～151・155は庄内式併行期に相当する可能性がある。

[第IX面 S D 9 0 5 出土遺物]

157～159は、土師器壺である。157は短頸壺である。やや扁平気味の体部に短い口縁部がつく。体部外面はハケ調整、体部内面はハケおよびナデ調整されている。

158は小型丸底壺である。体部外面および口縁部内外面はヘラミガキ、体部内面は指オサエおよびナデ調整されている。胎土には2～3mmの砂粒を多く含む。

159は直口壺の口頸部である。やや外反気味にのび、内外面とも密にヘラミガキが施されている。

160は、土師器器台である。口縁端部は横ナデで上方へつまみ上げられている。受部から脚部外面はヘラミガキが施されているが、脚部にはタタキ痕が残る。受部内面は横ナデおよびナデ調整によりミガキは施されていない。庄内式併行期のものである。

161は、土師器高杯である。短脚で椀形の杯部を有するものである。杯部内外面および脚部外面は密にヘラミガキが施されている。庄内式併行期のものである。

162は、土師器台付鉢である。低い台が付くものであり、台部は指オサエ、鉢部はナデ調整されている。

163は、庄内式土師器壺である。体部外面は細かなタタキ調整がなされ、体部内面にはヘラケズリおよび指オサエがみられる。口縁部は横ナデされ、口縁端部は上方へのびる。器壁は薄いものとなっている。

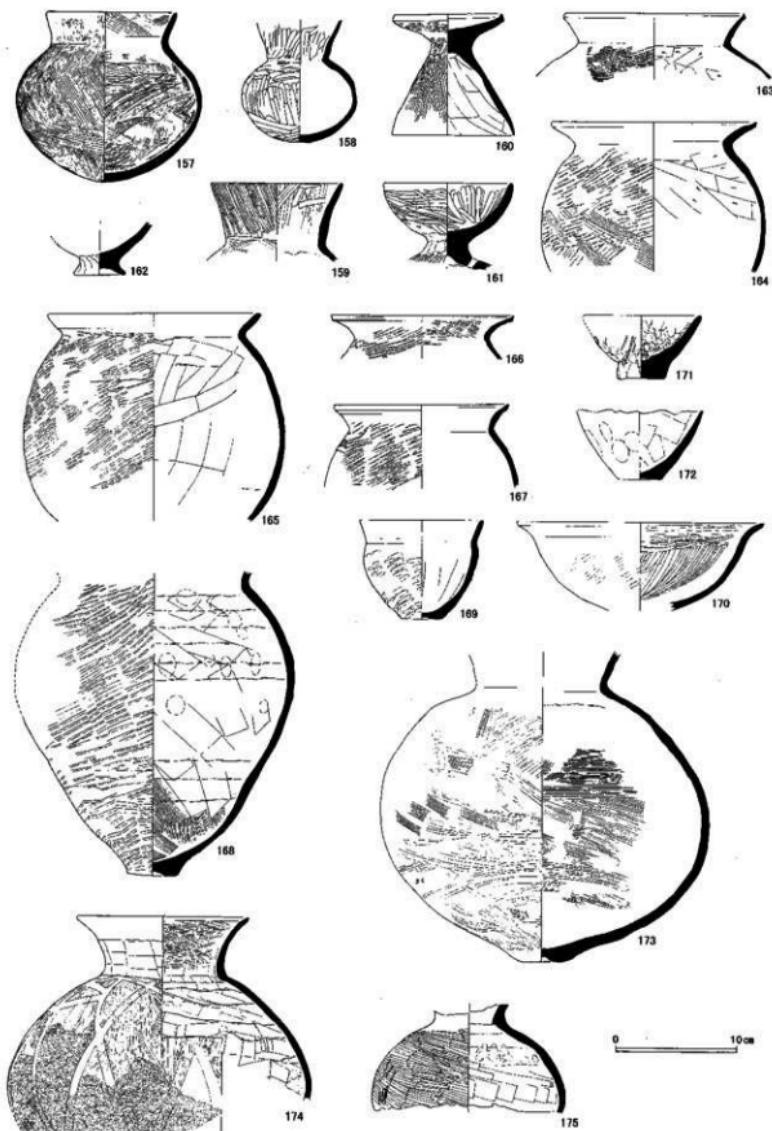
164は、庄内式併行期のものと考えられる土師器壺である。体部外面はタタキ後にハケ調整され、体部内面上半はヘラケズリ、下半はナデ調整されている。口縁部は横ナデされ外側に大きく開く。口縁端部はやや上方にのびる。

165～168は、弥生土器壺である。165～167についてはともに体部外面のタタキ調整が口縁下部まで施され、口縁部はその後横ナデされている。そして、165は球形の体部をもち、体部内面は板ナデ調整されている。166は強い横ナデにより口縁端部に凹線がめぐり、口縁内面にはハケ調整がみられ、体部内面は残存部においてナデ調整されている。167についても体部内面はナデ調整されている。

168は、2分割成形されたもので、体部の下部1/3程度のところに分割線が認められ、そこでタタキ痕の方向が若干変化する。体部内面は下部で板ナデ、上部は指オサエ後に板ナデされている。口縁部は残存部で横ナデされている。

169～172は、弥生土器鉢である。169は小型で口縁部が外側に折れるものである。体部外面はタタキ、内面は板ナデ、口縁部は横ナデされている。

170は、体部から短い口縁部が緩やかに外反して開く。体部外面はタタキ後にナデ調整され、内面はヘラミガキが施されている。胎土には3mm程度までの砂粒を多く含む。



第44図 TA区第IX面SD905出土遺物実測図

171・172は、やや粗い作りの小型鉢である。171は指オサエおよびナデ調整により作りだされている。

172は外面は指オサエおよびナデ、内面は板ナデ調整されている。

173～175は、弥生土器壺である。

173は胴の張った体部から口縁部がつく。体部外面はハケ調整後にヘラミガキ、体部内面はハケ調整およびナデ調整されている。口縁部は残存部において横ナデされている。

174は、広口壺である。体部外面および口頸部内面はヘラミガキが施され、頸部外面はヘラナデ、口縁部外面は横ナデ、体部内面はナデおよび板ナデ調整されている。体部外面には、編み物で覆っていたとみられる痕跡が残る。

175は、細頸壺とみられるものであるが、口頸部と体部下半が高さが揃うように意図的に割りとられている。体部外面はヘラミガキ、体部内面は下部で板ナデ、上位で指オサエおよびナデ調整されている。

上記で弥生土器としたもののうち、全形がわからないので断定はできないが、165・166・170については庄内式併行期に属する可能性が考えられる。

[第IX面 S D 9 0 2 ・ S D 9 0 4 ・ S K 9 0 1 出土遺物]

176・177は、SD 9 0 2 出土のものである。176は赤塗りされた土器片である。器種は不明であるが、内外面ともヘラミガキが施され、壺や鉢、高杯などの精製器種である。内外面とも赤塗り（トーン部分）されている。

177は、弥生土器広口壺である。外反して口頸部が開き、口縁端部は横ナデにより外側に端面をもつ。体部から頸部外面はミガキ、体部内面は板ナデされている。庄内式併行期に相当するものであろうか。

178・179は、SD 9 0 4 出土のものである。178は土器小型甕である。体部外面はハケ調整、体部内面は主にヘラケズリされているが、その下部は指オサエ後ナデ調整、中央付近では板ナデ調整されている。口縁部は横ナデされ、口縁端部はやや丸く上方に肥厚する。

179は、弥生土器甕である。体部外面はタタキ調整の後に、そして体部内面はナデ調整の後に、やや粗くヘラまたはハケ調整具でナデつけられている。口縁部は横ナデされている。

180～182はSK 9 0 1 出土のものである。180は、瓦質土器甕の把手であると考えられる。やや扁平な棒状を呈し、体部を貫く形で取りつけられたものであり、基部に体部内表面が残る。調整はナデ調整で、先端は平坦に整えられている。遺構出土遺物の中で180だけが古墳時代中



写真29 TA区第IX面SD905内土器壺（158）

期相当のものであり、SK901が調査区壁中にかかる形で検出されたことから、上位層からの混入であるとみられる。

181は、土師器壺である。口縁端部が内側にやや大きく肥厚するもので、体部外面は本来ハケ調整されていると考えられるが、残存部分においては板ナデされている。体部内面はヘラケズリされている。

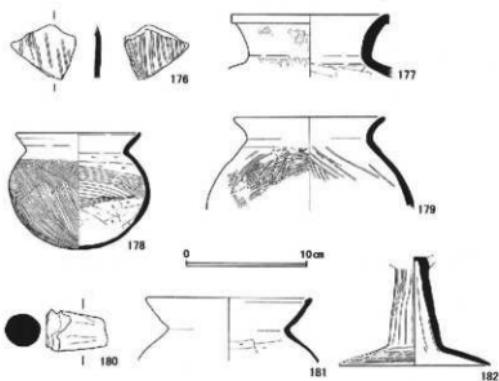
182は、土師器高杯の脚部である。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整されているが、柱状部内面には絞り痕が残る。裾端部は横ナデされている。

I-3. 第IX面のまとめ

第IX面においては、自然流路やビット、土坑などが検出された。ここでは、ビットP901で柱痕、土坑SK901で加工痕のある木片がまとめて検出され、人為的に形成されたと考えられる遺構も認められたが、遺構の主体は自然流路であった。

また、遺物をみると、自然流路内から残存状態の良好な遺物が大量に検出された。それは弥生時代後期から古墳時代前期前葉を中心とするものであり、庄内式併行期に相当するとみられるものが多く含まれていた。そして、遺物が出土したほとんどの遺構では、布留式期の遺物が下限時期のものとして認められ、それらは布留式古相に属するものであり、第IX面の遺構の時期としては、おおむね布留式古相段階に相当するものと考えられる。

ただし、SK901では、上位層からの混入とみられる瓦質器（180）を除くと、布留式新相段階に属する可能性のある壺（181）が検出されており、SK901については時期が若干下る可能性がある。



176・177: SD902, 178・179: SD904, 180～182: SK901

第45図 TA区第IX面出土遺物実測図



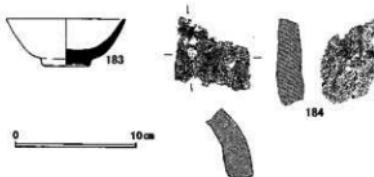
写真30 TA区第IX面SD904内土師器壺（178）

J. その他の遺物

擾乱土層および出土層不明のものであるが、2点の遺物を上げておく。

183は、青磁碗である。釉はオリーブ灰色であり、高台はケズリ出しによる。疊付から高台内は露胎となり、露胎部分は赤色がかった発色する。紋様は施されていない。

184は、丸瓦である。硬質ではあるがやや土師質に焼き上がっている。凸面はナデ消しされ、凹面もナデ消しされているが布目痕が残る。側面は、ヘラナデ調整が凸面側のみでなされ、凹面側は未調整のままである。中世以前のものである。



第46図 TA区その他遺物実測図

(3) TA区の調査のまとめ

以上のように、TA区では9面の遺構面が確認された。各遺構面の時期と主な遺構をまとめると、おおむね次のようになる。

第I面：鎌倉時代（13世紀中～後半）；条里地割方位に合う溝・ピットの並び

第II面：鎌倉時代（13世紀中）；井戸と考えられる土坑

第III面：鎌倉時代（13世紀前半～中）；条里地割方位に合う溝・井戸・自然流路

第IV面：鎌倉時代（13世紀前半）；自然流路・土坑

平安末～鎌倉時代（12世紀後半）；条里地割に関連する溝・ピットの並び、土坑

平安時代後期（11世紀末～12世紀初）；土坑

第V面：おおむね平安時代（9世紀後半以降）；条里地割方位に合う溝、畝状遺構

第VI面：古墳時代後期後葉（6世紀後半、但し7世紀に下る可能性あり）；溝、落ち込み

第VII面：古墳時代前期後葉（4世紀後半）；土器群、土坑、ピット、溝

第VIII面：古墳時代前期後葉（4世紀後半）；第IX面検出自然流路埋没後の溝、ピット

第IX面：古墳時代前期前葉（4世紀前半）；自然流路、ピット、土坑

第I面から第V面は、平安～鎌倉時代の遺構面となる。ここでは明確な建物跡を確認することはできなかったが、第II面と第III面で井戸跡が検出されており、ある段階で当地が居住域となっていたことは間違いないであろう。また、第II面を除くと、農作業にともなって形成されたと考えられる溝が多数検出され、当地は耕作地としても利用されたと考えられる。さらに、第III面と第IV面では、自然流路や流水にともない形成されたとみられる遺構が検出されている。このことから、第I面から第V面段階において当地は、耕作地として利用される時期と居住域として利用される時期が入り交じっており、その土地利用の変化を引き起こす契機が河川の氾濫にあったのではないかと考えられる。

なお、ここで検出された溝には、当地の豊鶴郡条里の地割方位に合うにものが多くあった。

また第Ⅰ面と第Ⅳ面では、これも条里地割方位に合う（もしくは影響を受けた）ピットの並びが確認された。このことから、第Ⅰ面から第Ⅴ面段階において当地での土地利用は条里地割の影響を大きく受けているものと考えられる。

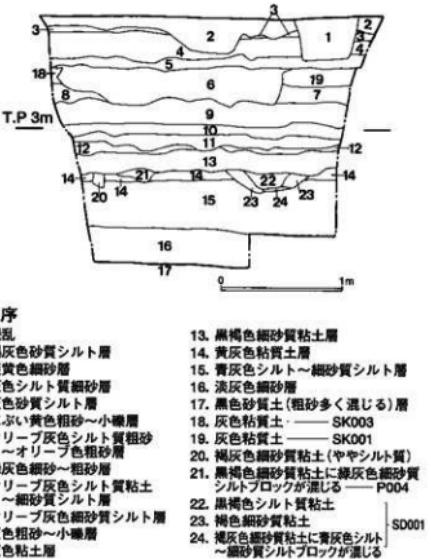
第Ⅵ面から第Ⅸ面は、古墳時代の遺構面となり、第Ⅵ面は古墳時代後期、第Ⅶ面から第Ⅷ面は古墳時代前期に相当すると考えられる。第Ⅵ面では、耕作地の区画ではないかとみられる落ち込みが検出され、当該期は耕作地として利用された可能性が考えられる。第Ⅶ面では、土坑やピットが多数検出されおり、当該期は居住域として利用された可能性がある。また、確認された9か所の土器群の中で、土師器高杯片を主体となす土器群が1か所あり、この場所で祭祀的行為が行われた可能性が推測される。第Ⅹ面では、第Ⅺ面検出の自然流路が埋没した部分に土砂が堆積して形成された溝が検出され、第Ⅺ面は第Ⅸ面から第Ⅹ面への移行段階における遺構面であるといえる。そして、第Ⅺ面については、自然流路が主体となるもので、第Ⅺ面から第Ⅻ面段階にかけて当地は、河川の氾濫等の影響を受けやすい環境にあったものと考えられる。

【本書の主な参考文献】

- 小森俊寛・上村憲章（1996）「京都の都市遺跡から出土する土器の編年研究」、（財）京都市埋蔵文化財研究所編『研究紀要第3号』。
- 皆原正明（1983）「畿内における土器の製作と流通」、奈良国立文化財研究所編『奈良国立文化財研究所創立30周年記念論集 文化財論叢』、同朋舎。
- 皆原正明（1989）「西日本における瓦器生産の展開」、国立歴史民俗博物館編『国立歴史民俗博物館研究報告第19集』。
- 杉本厚典（2001）「河内における弥生時代中期末から古墳時代初頭にかけての土器の型式編年と様式」、（財）大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会研究紀要第4号』。
- 杉本厚典（2003）「河内における布留式期の細分と各地との併行関係」、（財）大阪府文化財センター編『古墳出現期の土師器と実年代 シンポジウム資料集』。
- 中世土器研究会編（1995）『概説 中世の土器・陶磁器』、真陽社。
- 辻 美紀（1999）「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」、大阪大学考古学研究室編『国家形成期の考古学』。
- 寺沢 薫・森岡秀人編（1989）「弥生土器の様式と編年－近畿Ⅰ－」、木耳社。
- 寺沢 薫・森岡秀人編（1990）「弥生土器の様式と編年－近畿Ⅱ－」、木耳社。
- 中村 浩（1981）『和泉陶邑窯の研究』、柏書房。
- 柳本照男（1983）「布留式土器に関する一試考－西摂平野東部の資料を中心にして－」、ヒストリア第101号。
- 横田賀次郎・森田 勉（1978）「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」、九州歴史資料館編『九州歴史資料館研究論集4』。
- 米田敏幸（1991）「土師器の編年 1近畿」、石野博信他編『古墳時代の研究第6卷』、雄山閣。

V. G区の調査成果

グリット部（G区）の調査は、当初予定数より減り13か所のグリットを設定して行った。ここで、各グリットごとに検出遺構・遺物について上位面からまとめるが、各遺構面を述べるにあたっては、グリット番号を冠した後に遺構面次数を記すこととする。なお、この調査では3名が発掘担当者として関わり、土層名をつける段階で現地にて統一を図ることができなかった。これにより、ここで述べる土層名も統一を欠いたものになってしまったことを予め断つておく。また、土層の番号は各グリットごとのものとなる。



第47図 G1区東壁土層断面図

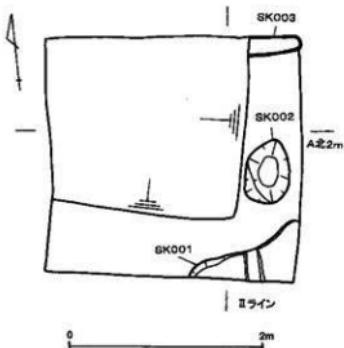
(1) G1区【6遺構面を検出】

[G 1-1面]

灰色砂質シルト層（第5層）下（標高T. P3.4～3.5m）において土坑3基が検出された。土層断面図では、にぶい黄色粗砂～小砾層（第6層）がSK001とSK003に重複するようみえるが、G 1-1面のベース層は第6層であり、これはSK001・SK003の形成時に第6層が遺構埋土として混じり、断面分層時に明確に区分し得なかつたものと考えられる。

検出された土坑のうち、全形を確認できたものはSK002のみであり、長径約65cm、短径約45cm、深さ約11cmを測った。またSK001は検出部で深さ約20cm、SK003は深さ約16cmを測った。埋土については、SK001とSK003で灰色粘質土、SK002で褐色粗砂が混じる黒灰色粘質土が認められた。

G 1-1面に関連しての遺物は、SK001で平安時代の黒色土器や土師器、中世の瓦器、



第48図 G1-1面平面図

須恵器の破片が少量検出された。図化できたものは185の東播系須恵器鉢のみであり、口縁端部がやや上方へのびるものである。この他、13世紀代のものとみられるミガキの粗い瓦器碗片が下限時期の遺物として認められたが、次下面のG 1-2面で14世紀代の遺物が出土していることから、G 1-1面の時期はそれより下るものと考えられる。

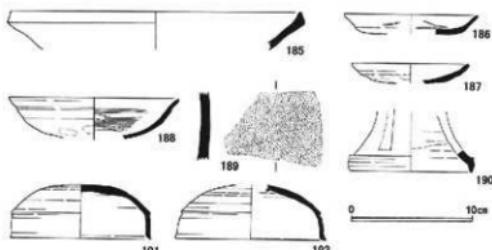
[G 1-2面]

第6層およびオリーブ灰色シルト質粗砂～オリーブ色粗砂層（第7層）・緑灰色細砂～粗砂層（第8層）下において、オリーブ灰色シルト質粘土～細砂質シルト層（第9層）をベース面（標高T. P約3.2m）として落ち込み001が検出された。落ち込み001は西側へ約30cmの深さで落ち込むが、その落ち込み肩は蛇行して南北にのびていた。

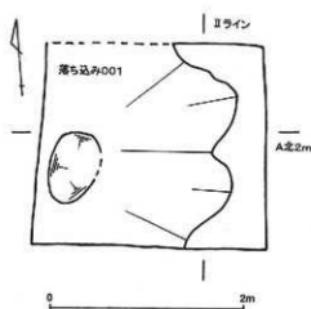
落ち込み001内からは、中世の土師器片や須恵器より鉢片などが出土したが、図化できたものは187の瓦器皿のみであった。またG 1-2面の覆土層からも瓦器皿（186）が1点出土した。187は、口縁部を短く横ナデし、底部外面は指オサエ・ナデ、底部内面はナデ調整されている。186については、口縁部が横ナデにより外側に開き気味となり、その外面に砂粒が動いた痕が残る。そして、底部外面は指オサエ、底部内面にはかなり粗いミガキが施されている。2点とも13世紀代のものと考えられるが、187の方が新しく13世紀末頃のものとみられる。落ち込み001出土遺物で下限時期のものとしては、14世紀代と考



写真31 G1-1面（西から）



第49図 G1区出土遺物実測図



第50図 G1-2面平面図

えられる須恵器すり鉢があった。

[G 1-3 面]

第9層下においてオリーブ灰色細砂質シルト層（第10層）をベース面（標高T. P約2.9～3.0m）として土坑3基が検出された。SK004はSK005に重複する形で検出され、長径約80cm、短径60cm、深さ約5cmを測った。SK005は全形が明らかでないが、深さ約5cmを測った。また、SK006はやや不定形な平面形を呈し、長径約75cm、短径25～35cm、約8cmを測った。これら土坑の埋土は灰色砂質シルトであった。

G 1-3面に関連した出土遺物では図化できなかったが、その遺物のほとんどは古墳時代後期とみられる須恵器・土師器であった。しかし、次下面のG 1-4面関連遺物では瓦器片がみられたことから、G 1-3面の時期は中世期に相当するものと考えられる。

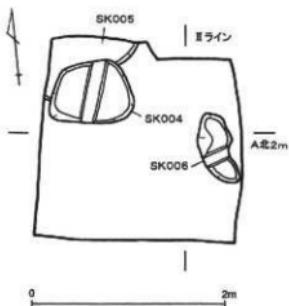
[G 1-4 面]

灰色粗砂～小礫層（第11層）下において灰色粘土層（第12層）をベース面（標高T. P約2.85m）としてピット1基が検出された。P001は径約40～45cm、深さ約22cmを測り、灰色粗砂が埋土として認められた。

G 1-4面に関連した遺物としては、P001より瓦器碗（188）が1点検出された。188は、口縁部が2段に横ナデされ、外面上段との境に凹線様のものが2重にめぐる。内面にはミガキが施されているが、外面には認められない。焼成時の還元化が完全でなく胎土がやや赤色がかり、炭素の吸着もあまい。13世紀前半のものと考えられ、G 1-4面の時期もこれに相当するものと考えられる。



写真32 G1-2面 (東から)



第51図 G1-3面平面図



写真33 G1-3面 (東から)

[G 1-5面]

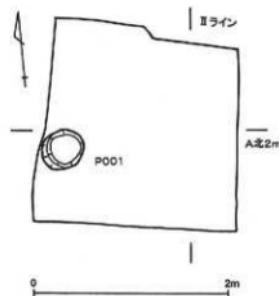
黒褐色細砂質粘土層（第13層）下において黄灰色粘質土層（第14層）をベース面（標高T. P約2.6m）として土坑2基、溝1条、ピット4基が検出された。土坑SK007はSK008に重複する形で検出された。SK007は検出部で円形を呈し、検出部分の最大長は約1.4m、深さ約15cmを測った。またSK008は検出部で最大長約90cm、深さ約5cmを測った。これらの埋土は黒褐色砂質粘土を主体とするものであった。

溝SD001はSK007に重複して検出された。検出部で長さ1.4m、幅約40cm、深さ約10cmを測り、N38°Wの方位をもってのびていた。埋土は上位に黒褐色砂質粘土、下位に褐灰色砂質粘土の堆積が認められた。

ピットは、建物跡等の並びとして確認できるものはなかった。P002とP003がSK007と重複して検出されたが、埋土がSK007とほぼ同一の黒褐色砂質粘土を主とするものであったことから、SK007の完掘段階で確認したものであり、SK007との重複関係は明確でない。P004とP005はともに調査区の際にかかりその半分程度を検出したものである。その埋土は黒褐色砂質粘土を主とするものであった。

G 1-5面に関連した遺物では、192がSK007から出土した須恵器杯蓋である。口縁部から内面は回転ナデ、天井部外面は回転ヘラケズリされている。稜は短く、口縁部端面に浅く凹線が入る。この他遺構出土の遺物で図化できるものはなかったが、おおむね古墳時代前期から中期の土師器片、須恵器片がみられた。

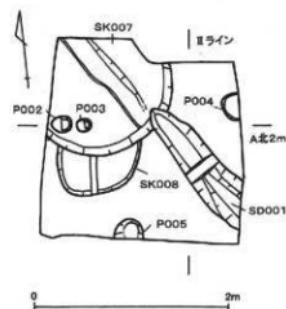
また、G 1-5面の覆土層となる第13層で



第52図 G1-4面平面図



写真34 G1-4面（東から）



第53図 G1-5面平面図

は、古墳時代後期のものとみられる須恵器片を若干含むが、主体は古墳時代前期から中期のものであった。189は初期須恵器もしくは陶質土器甕の体部片である。外面には縄蓆文がみられ、内面は丁寧にナデ調整されている。190は須恵器高杯脚部である。回転ナデにより調整され、裾端部は下方へのびてわずかに段を有する。透孔部分で破損しており、透孔の大きさと数は不明である。191は須恵器杯蓋である。口縁部から内面は回転ナデ、天井部外縁は回転ヘラケズリされている。稜は短く丸みをおび、口縁端部の段はほとんど消えている。また、第13層からは馬か牛の寛骨の可能性のある骨片が出土している。

[G 1-6面]

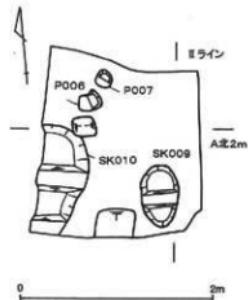
第14層下において青灰色シルト～細砂質シルト層（第15層）をベース面（標高T. P約2.5m）として土坑とピットが検出された。土坑SK009は長径約60cm、短径約40cm、深さ約7cmを測り、SK010は調査区際にかかる形で検出され、検出部で最大長約1.1m、深さ約18cmを測った。

ピットP006とP007はいずれも小型のもので、P006は径15～25cm、深さ約5cm、P007は径約17cm、深さ約9cmを測った。ピットおよび土坑とともに埋土は黄灰色粘質土を主体とするものであった。

G 1-6面と関連した遺物で図化できるものはなかったが、弥生時代後期～古墳時代前期の遺物片がみられた。その下限時期のものとしては土師器布留式甕片があり、おそらくG 1-6面の時期としては古墳時代前期後葉が想定できる。



写真35 G1-5面（東から）



第54図 G1-6面平面図



写真36 G1-6面（東から）

以上、G 1 区検出の 6 面の遺構面についてみたが、G 1-6 面のベース層となる第15層内でも古墳時代前期を中心とする土師器片が多く検出された。第15層下において遺構を確認することはできなかつたが、これは限られた調査区の範囲内のことであり、調査区外に遺構が存在する可能性は高いと考えられる。

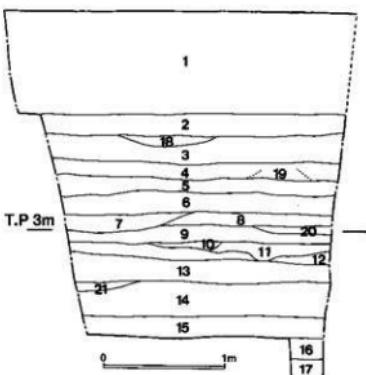
さて、各遺構面の時期であるが、G 1-1面は14世紀代以降、G 1-2面は14世紀代、G 1-3面は限定できず13世紀前半から14世紀代の間、G 1-4面は13世紀前半、G 1-5面は5世紀後半、G 1-6面は4世紀後半に相当するのではないかと考えられる。そして、これらの遺構面をTA区検出の遺構面と対比してみると、層位的な対比は難しく遺物相と遺構面のレベルからの推定となり断定はできないが、G 1-6面がTA区第Ⅶ面に相当する可能性が考えられる。

(2) G2区【4遺構面を検出】

[G 2-1面]

灰色粗砂層(第2層)下において淡灰色細砂層(第3層)をベース面(標高T.P約3.75m)として土坑、ビットが検出された。グリット部の調査では段掘りして掘削を進めたことから、上位造構面のG2-1面では段掘りのために他の造構面より西側が拡張する形となった。

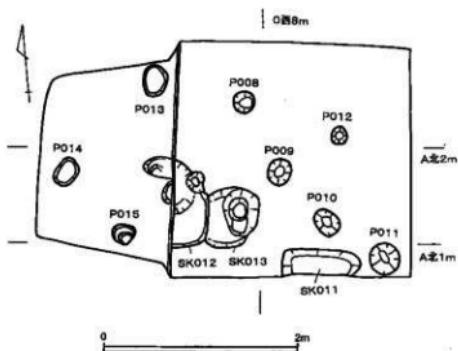
土坑は3基検出された。S



土層序

1. 現代盛土・表土層
2. 灰色粗砂層
3. 淡灰色細砂層
4. 淡茶色細砂質土層
5. 灰色砂質土層
6. 喀色細粒土層
7. 灰色細沙層
8. 灰色粗沙層
9. 灰色粘土質土層
10. 茶褐色細砂層
11. 灰色粗砂層
12. 喀灰色粘質土層
13. 黑灰色粘土層
14. 黑灰色粘土(軟灰)層
15. 喀灰色粘土層
16. 喀灰色粘土(粗砂混じる)層
17. 喀色粘土層
18. 喀灰色砂質土 — SK013
19. 香灰色沙質シルト — 唯峰001
20. 茶灰色シルト — 落ち込み002
21. 喀灰色細砂 — 落ち込み003

第55図 G2区南壁土層断面図



第56図 G2-1面平面図

る形で認められ、検出部で最大長約80cm、深さ約12cmを測った。SK012とSK013は重複する形で検出されたが、SK012の西半部分は調査区を拡張した段階で確認したもので、検出面が東側より数cmレベルが下がったことから、その東側と西側のつながりが不明確になってしまった。また、SK012・SK013ともに局部的に深くなる部分があり、SK012で3か所（深さ約5cm、10cm、27cm）、SK013で1か所（深さ約31cm）の局部的な窪みが認められ、遺構精査時に確認できなかつたが、ピットが重複していた可能性もある。

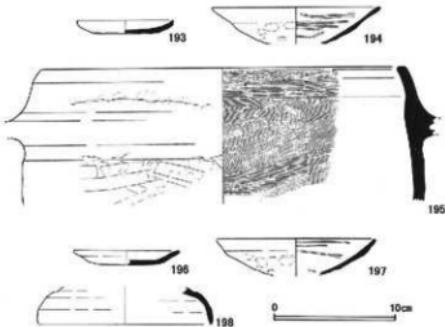
ピットは径15~30cm程度のものが8基検出された。P012・P014を除くと深さが19~31cmとしっかり掘り込まれたものであった。このうち、P013・P009・P010・P011がN49°Wの方位をもって並ぶように検出されたが、調査区が狭小であることから、これが即建物跡や杭列跡の一部であるとは断定できない。

G2-1面の関連遺物をみると、図下できたものでは195・196が遺構出土の遺物である。195はP013から出土した瓦器羽釜である。口縁部から外面鈎までは横ナデ、鈎直下は指オサエでそれより下は板ナデされている。また内面も板ナデされている。196はSK013から出土した土器師皿である。口縁部が1段ナデによって外方へのびる。また、G2-1面の覆土層出土の遺物で図化できたものとして193・194がある。193は土器師皿で、短い口縁部がつき、口縁部は横ナデされている。194は瓦器碗で、内面のミガキは粗く、外面にミガキは認められない。さらにG2-1面のベース層内の遺物として197の瓦器碗があった。これも内面のミガキは粗く、外面には施されていない。また退化した高台がわずかに残存する。

ここで出土した遺物の時期相は13世紀中~14世紀代のものであり、図化はできなかったが、SK012から火鉢とみられる瓦器片が出土しており、G2-1面の時期はおおむね14世紀代に相当するものと考えられる。



写真37 G2-1面西半 (北から)



第57図 G2区出土遺物実測図

[G 2-2面]

淡茶灰色砂質土層（第4層）下において灰
色砂質土層（第5層）をベース面（標高T.
P約3.45m）として畦畔が1条検出された。
畦畔001は、ベース面との比高差1~6cm
で青灰色砂質シルトの高まりが認められた。
幅は上端約35cm、下端約50cmであり、おおむ
ねN11°Eの方位でのびていた。この方位は
当地域の条里地割方位とほぼ合うものであ
り、畦畔001は条里地割に基づいた農作業
の中で形成されたものと考えられる。

G 2-2面に直接関連する遺物の出土はな
かったが、G 2-2面のベース層内の遺物に
は13世紀中~後半のものとみられる土師器
片・瓦器片があった。

[G 2-3面]

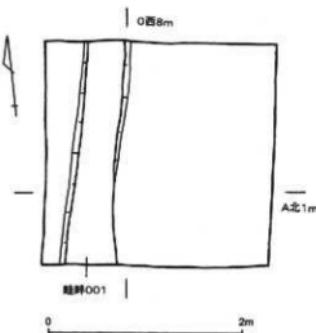
灰色細砂層（第7層）・灰色粗砂層（第8
層）下において灰色粘質土層（第9層）をベ
ース面（標高T.P約3.05m）として落ち込
み跡が1か所検出された。落ち込み002は、
調査区の南西隅で検出され、約8cmの深さで
落ち込んでいた。

G 2-3面に関わる遺物としては、G 2-3
面の覆土層にて土師器・須恵器の細片が1点
ずつ出土したのみで、落ち込み002からの
出土遺物はなかった。

[G 2-4面]

黒灰色粘土層（第13層）下において黒灰色
粘土（軟質）層（第14層）をベース面（標高
T.P約2.55m）として落ち込み跡が1か所
検出された。落ち込み003は、調査区の東
側へ5cmほどの深さで落ち込んでいた。

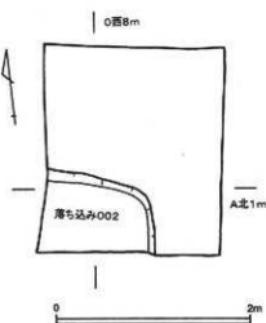
G 2-4面に関わる遺物としては、G 2-4



第58図 G2-2面平面図



写真38 G2-2面（北から）



第59図 G2-3面平面図

面の覆土層にて古墳時代中期～後期にかけてのものとみられる須恵器片・土師器片が検出され、須恵器杯蓋（198）1点が図化できた。198は残存部で内外面とも回転ナデ調整されたものである。また、落ち込み003からも当該期に相当するとみられる須恵器片・土師器片の出土があったが、図化できるものはなかった。

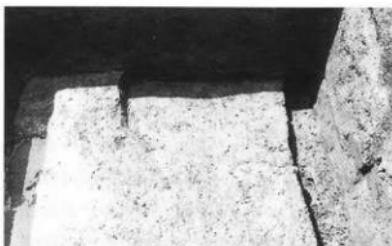


写真39 G2-3面 (北から)

以上、G2区検出の遺構面についてみたが、G2-4面以下の第14層と暗灰色粘土層（第15層）においても古墳時代のものとみられる須恵器・土師器が包含されていた。これに関連して遺構は検出されなかったが、G2区外に遺構が展開する可能性は高いと考えられる。

各遺構面の時期についてみると、G2-1面は14世紀代、G2-2面については直接的に関わる遺物の検出はなかったが、そのベース層において13世紀中～後半にかけての遺物が認められ、G2-1面との状況とも鑑みると13世紀後半～14世紀の幅の中に入るものと考えられる。G2-3面は時期判断に繋がる遺物の出土がないことから時期は不明である。G2-4面は6世紀後半に相当すると考えられる。そして、G2区遺構面とTA区検出遺構を対比すると、時期と遺構面のレベルからしてG2-4面がTA区第VI面に相当すると考えられる。また、時期を限定することはできなかったが、条里方位に合う畦畔が検出されたことと遺構面のレベル、そして他のグリットの検出遺構の様相から、G2-2面がTA区第I面に相当するのではないかと考えられる。



第60図 G2-4面平面図



写真40 G2-4面 (東から)